最果ての魔女

eliS*m

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界が滅びたのは一体いつ、どうしてだったか。そんなことさえ今を生きる人が忘れてしまった時代のこと。人類は汚染された地上を捨て、暗く湿った地底――かつての都市の「基盤」へと逃れていた。

狭い居住地しか知らない少女は叔父の死を皮切りに全てが一変し、故郷から追放されるかのように逃げ出した。

見捨てられたこの世界、そんな人間の先は往々にして長くない。しかし彼女は全てを失った時、ヒトの形をした異形と「ストーカー」を名乗る探索者達に出会い、最果ての魔女を探求する旅が始まる。

小説家になろう様でも投稿しています。
向こうで合致するカテゴリタグがなかったためこちらもファンタジータグにしていますが、かなりＳＦ寄りです。

目次

1、Обычная Девушка（ありふれた少女）
1、闇の先 ―― 1
2、砂の夢 前編 ―― 11
3、砂の夢 後編 ―― 19
4、転がり落ちて ―― 26
5、異形 前編 ―― 36
6、異形 後編 ―― 49
7、代償 ―― 65
8、選択 前編 ―― 76
9、選択 後編 ―― 89
2、Незнакомцы（異邦人）
10、亡霊 ―― 103
11、ストーカー 前編 ―― 117

1、Обычная Девушка（ありふれた少女）

1、闇の先

一人の少女が歩いていた。何処までも、あてもなく。

どれだけ長い距離を歩いてきたのだろう。全身の倦怠感は見て分かるほど酷く、ヨロヨロとでもゆっくり前へと進むことが精一杯。淡く、少しばかり紫がかった黒の長髪は枝毛だらけで乱れ、身なりも相応に酷い。放浪者という表現さえ違和感がなく、そして紛れもない事実だった。石か何かに躓けばなすすべなく転んで、もう二度と立ち上がれないかもしれない。なけなしの荷物でさえ、次の瞬間には彼女を押し潰してしまいそうだった。

周囲は完全な暗闇に包まれ、光の兆しは皆無。いつもなら何処かから響いてくる水音ですら今は静まり返り、トンネルに響く足音と自分の弱まった心臓の鼓動だけが異常に大きく聞こえる。まるで自分の最後を暗示しているかのようだ――彼女、アリサ・クレーヴェラは一人他人事のように思った。

古くから闇は恐怖の象徴の一つだ。人類が地下に住み始めてから長い年月が経つが、未だに適応したとは言い難く、コウモリのように暗闇を見渡せるわけがない。明かりが

なければ、遠近も何もなく、何処まで続くかわからない濃密な黒に塗り潰された光景が網膜に映るだけ。

だがそれは「無」ではない。「虚空」ではない。人類の感覚の大部分を司る視覚が遮断されてしまう環境において知覚できないだけで、「闇」の先には確実にナニカがある。それがただの空間であるならば問題ないのだが、もしかしたら一寸先が崖になっているかもしれず、あるいは人食いミュータントが口を開いて待っているかもしれない。それとも、ソレはもっと危ない得体の知れないナニカだろうか。たとえ何もなかったにしても想像力を無駄に掻き立てられ、恐怖に恐怖する。それがこの時代の「闇」であり、一番身近にあって恐れられるものだった。

アリサは一人、そんな場をずっと歩いてきたのだ。最初はランタンがあったから良いが、燃料が切れてからはその心細い灯でさえ潰えてしまった。一気に時間が濃密になったように感じられ、それだけ疲労も心体共に重くのしかかる。

暗闇の中を歩き進めることになってしまった始めは、気が狂いそうになっていた。もはや自分は死んだものと諦め、衝動的に大声で泣き叫んだが、反響して響いた自分の声に驚いて泣き止んだ。それが自分の声だと分かっても、あちこちに跳ね返って加工された絶叫はまるで悪魔が恐ろしい雄叫び声を上げているように思えたからだ。

じっと身体を固めて耳を澄まし、何もないことを確認してからまたゆっくりと進み始

めたが、動き始めるだけでもどれだけ時間がかかったか。
慣れない間は壁が突然目の前に現れたような幻覚を覚えたり、幻聴だろうか低い地響きのような音が聞こえてきたりして、その度にアリサは動きを止めて安全を確認しなければならなかった。
そんな風に歩き続ければ疲れはかなり早く溜まり、当然のように身体が休みを求めて睡眠が必要になる。通路の脇に手頃な場所を見つけて、小動物のように身を埋めて眠るたび、もう目覚めることはないのではないかと恐れるがそれでも睡魔はやってきた。呆気ないほどあっさりと泥のような眠りにつき、そして意識的には次の瞬間に飛び起きている。真に眠ったかどうかなんて自信が持てない。自分がまだ生きていることにほっと安心するが、そんな状況では疲れは殆ど抜けない。
歩いて、疲れて、眠って、目覚めて。寝ても覚めても真っ暗闇の中、そんなサイクルをぐるぐると五周ほど巡った。そうして今となっては永遠に思える時の中、ただ黙々と繰り返すだけだ。アリサは何処か、自分が現実世界にいないような気さえしていた。
実は自分はもう死んでいて、これはあの世へ向かう道なのではないか。あるいはこれが、これこそがあの世なのか。そんなことさえ思った。
積み重なった疲労と空腹からか自分の四肢の感覚は朧げになっていて、指の先なんてもう捉えられない。そんな中では自分の身体が闇の中に溶け込んでしまっていて、闇が

自分の身体の一部のようにさえ感じ始めていた。

しかし、そんなある意味での無敵感や万能感は長続きしない。所詮一過性のものにしか過ぎず、ちょっとした衝撃ですぐに割れて消えてしまう。何度も何度もこの空間の中で繰り返し経験していたのだから、それは誰よりも彼女自身がよく理解していた。

「あぐッ……」

遂に何かに躓いて転ぶ。アリサは糸が切れた人形のようにパタリと倒れた。背負っていた袋から中身の殆どなくなった水筒が転がり出て、カラカラと金属特有の空虚な乾いた音を立てて転がっていった。殆ど受け身も取れなかったので、どうやら身体を強かに打ってしまったらしい。膝も擦りむいたのかズキズキ痛み、顔に触れる地面は湿っていて冷たい。当然とばかりの我が物顔で現実感が帰ってきて、さっきまで感じていた夢のような浮揚感は四散していく。そして、突然堰を切ったような悲壮が溢れてくる。あまりの惨めさに、アリサは一人自嘲混じりに目を伏せた。

（叔父さん……。私なんかには、やっぱり無理だったのかな……）

問いかけるように古いメダルのペンダントを握りしめるが、それもまた冷たいだけで何も返してはくれない。緑青色のメダルに彫られた、名も知らない壮年の男性が表情を変えるはずもなかった。いや、本当は彼女も既に分かっているのだ。アリサはこの試み自体がそもそも無理なものだったのだろう、と何処か悟ったような確信を持っていた。

唯一の家族たる叔父が死んでから、「魔女」を自称するあの老婆が村にやってきてから。それまでは大きな問題なんて殆どなかったのに、まるで突然奈落の底に突き落とされたかのように境遇は暗転し、アリサを取り巻く環境は急速に悪化していった。積み上げてきたものが、あれだけ確かにアリサの手の中にあったものが、一瞬で零れ落ちて崩れていった。

この数週間は全てが濃密だった。比較的安定して呑気な日々を送っていた彼女にとっては、それは数年分の記憶にも匹敵するほどの密度がある。ほんの少し前の、一か月ほど前の情景が脳裏に浮かんだ。もうきっと手に入らない、当たり前だった日常。それが大昔のことのように思えた。

彼女には止むに止まれぬ事情があった。こんな子供が一人で村を出ることを決意するほどの。彼女は無知であったが愚かではなかったので、自身の行いがどれほど危険なことであるかは十分承知の上だった。承知の上で、村を出た。

彼女には頼る先どころか行き先もない。ただ村から逃げ出しただけだ。行き着く先がどうなるかなんて全く分からなかった。何処かの村か街に辿り着ければ……と楽観論を思い浮かべ、きっと何とかなると自分に信じ込ませて足を進めた。そうでもしなければ脚がすくんだが、村に留まることはどの道絶望でしかなかった。

だが、現実はあまりにも非情だ。早々に幻想は打ちひしがれ、足を進めた未来は行き

止まり。結果はこの末路だった。殆ど外界へ出たことのない少女は自分の試みが無謀な挑戦どころか、ただの現実逃避にしか過ぎなかったということを、今度こそ確実に理解した。

今はまだ生きている。足も頭もまだ動く。

ただそれも時間の問題だ。このまま諦めて身体を放り出してしまえば、トンネルに巣食う生き物に食われてそこらに散乱する骨の一部となる。

故郷という、温かで平和だった場所から壁一枚挟んだ向こう側。

この世界はあまりにも、命の価値が軽い。

一体どうすればよかったのだろう。

いくら考えても答えは出ない。きっと何が正しいとか間違っているとかじゃなく、ただそこにはこうであるという結果だけが無慈悲に転がっているだけなのだ。もしかしたら、アリサ・クレーヴェラという人間の人生はここで袋小路になる運命だったのかもしれなかった。

溜息が暗闇に消え、一筋の涙が頬を伝った。悲壮はもう十分だ。なんにしろとにかく今は歩き続けなくてはならなかった。ずっとこうして横たわっているわけにもいかないのだ、そうすれば本当に死んでしまう。

最後に時計を見たのは一体いつだったか。最早、時間など今はもう分からない。ただ

長いこと移動してきたことだけは事実だ。もう少しくらい歩けば何がしら助けになるものが見えてくるのではないか。それがきっと報われない願いであるとは頭の何処かでもう気がついていたが、なんとか身体を起こして立ち上がる。存在すらしない希望を求めるように正面を向き、また歩き出そうとした。

そして気がついた。さっきまではしなかった、何かが腐ったような生温かい臭いが前の方からすることに。

前は完全な暗闇だ。だが、眼では見えないその中には何かの気配がある。

心臓が跳ね上がる。とっさに、肩に背負っていた古いボルトアクションライフルを構えた。村を出る前にせめてものと拝借した荷物のうちの一つ、村の倉庫に仕舞われてそのまま忘れ去られたのであろう、無駄に重くて長い鉄の棒のようなものだった。確実にアリサの体力を削り取っていくだけで何の役にも立たなかったから、これまでに幾度となく捨てようかと思った代物だ。「もしも」という恐怖心から結局捨て切れなかったのだが、今はこの物干し竿に心から感謝した。

アリサはただの村娘だ。銃を撃つ訓練など殆ど受けたことがなかったが、昔叔父が見せてくれたものを必死に思い出して操作する。

ちゃんと動作するかも分からなかった。だが祈るようにトリガーを引くと、鈍い爆発音と閃光が上がった。

瞬間、空間が明るく光り、暗いトンネルを照らし出す。壁や天井に走る古いケーブルやパイプの束、点検用の計器類。そしてなによりアリサは自分のすぐ目の前にいた存在をしっかりと捉えた。

涎を垂らし、二メートルも近いだろう巨大な大鼠。ギラギラと牙を剥き出しにし、ガラス球ほど小さい黄色い眼はこちらを間違いなく見ていた。

手応えはなかった。弾丸は当たっていない。しかも銃声は相手を驚かせるどころか、怒らせようにさえ見えた。

必死に銃を操作して、相手に今度こそ銃弾を当てようとする。

だが、

「そ、そんな……ッ！」

一発は撃ち出すことができた。だが油も差さず長い間放置されていたライフルにはそれが限界だったのだろう。次弾を装填しようと引いたボルトは半分もいかないほどで引っかかり、正真正銘ただの物干し竿に成り果てた。

アリサは今度こそ銃を放り投げて踵を返し、来た方向へと全力で走り始めた。元々体力は残っていない。それでも振り絞るように、とにかく目の前の危険から逃れる為に。動物としての、本能的な行動。この時ばかりは頭から疲労や諦念が抜け落ちてしまってさえいた。

（嫌ッ！死にたくない……死にたくない！）

グズグスせずに転んですぐに起き上がっていれば、奴が近づいてくるのにもっと早く気がつけていたのではないか。そんな後悔が一瞬頭を巡るが、パニックにかき消されてただただ生き残りたいという気持ちだけが残った。

神様でも悪魔でもなんでもいい。お願いだから私を助けて。なんだってするから。本当だから。

死にたくない、死にたくない、死にたくない。

私は。私は、私は――。

だがもう、全てが手遅れだった。

後ろから何か大きなものが追いかけてくるような音がして、背中に大きな衝撃を感じる。そのまま前に弾き出されるように身体が飛んだ。壁に身体が叩きつけられて顔面を強かに打ち、脳が揺れる。苦痛を感じる前に目の前の壁がぐらりと揺れ、割れた。

時間が酷く引き延ばされたように感じた。視界は働かないのだから、感覚だけをスローモーションに感じた。ふわり、と全身を浮遊感が包み込む。それは今まで味わったことのない、奇妙な感覚だった。最後の瞬間、自然と全てを悟る。あれだけ動転していた頭はどうしてかすっきりしていて、何処までも透き通っていた。口は動かなかったが、頭の中で彼女は呟く。ああ、もう自分は死ぬのだ――と。

身体が、空いた穴から繋がった広い空間に落ちていく。そして、落ちた先で何かにぶつかる衝撃が訪れる前に彼女は自分の意識を手放した。

それはこの世界にありふれた話。こうして誰にも知られることなく、一つのヒトの命が暗闇に消える。

そうなる筈だった。

2、砂の夢　前編

「ねぇ、叔父さん。今日も外の話を教えてよ」
「おお、いいぞ。どんな話が聞きたい？」
「この間ちょっとだけ聞いて、結局中途半端に終わっちゃった大蛇の話を聞きたいな……」
「あいわかった。そうだな、なら続きを話すとしようか」

寝床で薄い掛け布団に包まりながら、幼い少女は自身の叔父に寝る前の話をせびっていた。彼女は今年で既に十歳になり、村の子供達の集まりでは年長者として場を纏める役割を担ったりもする。そんな少女がするには少し子供らしすぎる行いかもしれないが、少女は特に気後れすることもなく叔父の語る物語を今日も聞きたがった。

彼女がいつも聞きたがるものは村の外の話だ。叔父の実体験や、何処かで聞いた噂話、本で読んだ知識など。いつも村の中にいて外に出たことなど殆どなかった彼女にとっては、そのどれもが新鮮で興味深く感じた。勝気で冒険心溢れる男子達とは違い、少し臆病なところがある彼女は村を出てまでそれを確かめてみようとは思わない。だがそれでも代わり映えのない、この狭い日常の外にはとても巨大な世界が広がっている

のだと夢に胸を膨らませる。

机に置いた蝋燭の灯りが二人の顔を照らし出している。少女の顔は期待に満ち、眼は輝いていて、一方の叔父もいつもは厳格な顔を緩ませ、自身の養娘に優しげな表情を向けていた。板を立て、厚手の布を扉代わりにして仕切っただけの小さな部屋だから、体格の大きい叔父が入ると少し窮屈だ。けれども少女にとってはそれすら何処か温かみを感じるものとして享受していた。

それはきっとかけがいのないものであった。けれども失うまでその事実に気がつくことはないのだろう。「この時間はきっと永遠に続く」という、どうしてかそんな淡くて儚い確信が何処かにあったのだから。

??

「基盤」は死にかけの巨大な生き物だ。人類はそれに巣食う寄生虫でしかない。

「旅人、あるいは放浪者の手記」第八巻冒頭。

??

圧倒的な科学力を持っていたと言われる、今では旧文明と呼ばれる前文明が滅びた後の時代。衰退の理由さえも今を生きる人々が忘れ、汚染された地上に未知の現象や凶暴なミュータントが跋扈するようになった時代のことだ。

かつての世界を形作ったものは既に風化し消えかけているが、それでも人類は生き延びている。地上を捨て、巨大な旧文明都市の「基盤」――地下の世界へとその生息圏を移すことによって。数を大きく減らした人類は地下世界に点々と居住地を建て、大きく後退はしたもののある程度の文明を維持した生活を送っていた。

アリサは他の多くの人間と同じように地下世界に生まれた、何の変哲もない普通の少女だった。辺境の村に暮らし、そこから出たことも数えるほどしかないようなただの村娘。素晴らしい環境であった、とは全くもって言い難い生まれだ。むしろ、恵まれない弱者の部類でしかない。

そもそも彼女の暮らす辺境の村というのは、元々この基盤を流れる水路の保全管理の為、合流地点となる場所に近くの街や村から人が集まって共同体を作り出したものが前身だった。

地下世界において人類は殆どの場合、水や空気、電気を旧文明のインフラ設備に依存しきっている。これらは一言に生命線であり、その保全管理は非常に重要な役割だ。その殆どは自動化され、「基盤」の予備の予備の予備電源が尽きるまで動き続けるだろう。

しかしそれらは長年の使用で劣化し、機能がどんどん低下していっている。

例えば水路の場合、フィルターや水路に引っかかった障害物を撤去しなければいつか詰まり、洪水や浸水が起き始める。空気の換気・浄化が間に合わなければ汚染が地下に広がるし、最悪窒息する。電力が切れることは言わずもがな、全ての崩壊を意味する。そういった場所で人類が生存することは不可能だ。ただでさえ少ない人類圏を維持するには、何とかして旧文明の設備を生存させなければならない。それは残された人類共通の課題であり、だからこそこういった成り立ちで生まれた居住地は非常に多いのだった。

しかしそういった場所は基盤のあちこちに点在しており、必ずしも現在の人類にとって住みやすい場所にあるとは限らない。特に、水路の保全目的で作られた居住地はこの傾向が顕著だ。電気や空気の場合、管理すべきような重要なポイントは数が比較的少なく、戦略的な理由からも大規模な都市の直接管理下に置かれていることが多いのだが、一方水路なんて基板の中をうねるように流れているのだから数が桁違いなのだった。

それでも大概は流れてきた異物——魚やスクラップなど——の掃除がてら、それらの売買を生業としたり、電力や土地の都合さえつけばその大量の水資源を使って畑を広げることができた。税を納めたり、あるいは村自体に十分な価値があれば大規模な都市国家や同盟の傘下に加わることもでき、有事の際には盗賊やミュータントからの被害から

守ってもらえる。いわば、水路回りの小規模居住地はかつての農村の役割を果たしていると言えよう。

一方、アリサが生まれたこの村の場合、地下世界の中でも主要街道や大きな都市からは遠く離れた人類圏の辺境に位置していた。この先の通路は殆どが長らく人の手が入っておらず、しかも行き止まりが殆どの閉塞した場所。立地が悪すぎるせいで交易に恵まれなかった上、電力も余裕があるとは言い難く作物も自分達の食い扶持以上の分を確保するのは難しかった。当然税なんて払えないのだから同盟といったものには所属すらしておらず、かといって大した価値もないから向こうからこちらに打診してくるようなこともない。はっきり言って、足手まといだからだ。

結果は殆ど自給自足の生活を送り、自分達でどうしようもないものは行きに三日四日はかかる街へ向かうか、不定期に訪れる旅商人に頼るしかない有様で、地下世界の中でも生活基準は最低に近い。人口も女子供老人を含めて二百人は絶対に超えなかった。だがここを離れたところで、余所者を受け入れてくれるような居住地も期待できない以上、彼らにとって居場所はここしかないのだ。そんな見捨てられた場所。

一方で――立地が非常に悪いのは事実だが――それでもこういった村は、経済格差が圧倒的なこの世界で最もありふれていたし、なにより幸いな点もいくつかあった。

それは住民の多くが自分達がこの基盤を生かしているということに誇りを持ってお

り、なんだかんだ苦労はすれども飢えることもなかったことだろう。自尊心と腹が満たされていれば大体の不満の元は解消される。それに、何処かの庇護下に入っていなかったとしても、立地故に盗賊やミュータントの被害は比較的少なく、都市や同盟同士の血みどろの生存戦争に巻き込まれることもないのだから、平和なのは間違いなかった。

ただ、そういった刺激がないからこそ長いこと変わることなく——進化することもなく——ダラダラと長い停滞が続いていたのだが。

そういった、この世界では比較的平和で幸運な村に生まれたアリサだったが、彼女が村から離れるまでに、それでも二度の大きな転機が彼女に訪れた。

一つ目は、珍しくも村に伝染病が広がった時だった。狭い居住地に村人がひしめいて生活していたのだから、数日と経たず病は村中に襲い掛かった。アリサと母親も多分に漏れず病に倒れた。

村には医者が一人、診療所も一つしかなかった。当然治療が間に合うわけもない。感染を恐れ、大量の村人が故郷を逃げ出していった。アリサの父は無事であり、薬を買うために街へ任務に出かけたが、渡された金や部下共々姿をくらまし二度と戻らなかった。

結局母はそのまま死んだ。隔離されていたことや、アリサ自身も高熱で魘されていたことから死目に会うすらできなかった。蒸発した父に何を思い、孤独に逝ったのだろう

か。こういった事情から、五歳の時には彼女の両親は既にいなかった。

アリサ自身は運良く症状も酷くなく、やがて回復した。その頃には伝染病自体も落ち着いていた。しかしながら両親を失ってアリサに家族はもうおらず、完全に孤児の身だ。彼女の前には何人か兄や姉がいたが、皆アリサが生まれる前に死んでいた。そういったことはさほど珍しくもない。

今回の騒ぎは大きく、彼女のように親を失った子供は多かった。故に、最初は彼らとともに村の孤児施設に入れることが話し合われたが、最終的に彼女を引き取ったのは当時村の運営幹部をやっていた母方の叔父、ボリスだった。彼はこの村では珍しく四十を超えて結婚しておらず、突然湧いて出た娘に困惑しながらも相当可愛がってアリサを育てた。だから、彼女の不自由は幼い頃の境遇に反してかなり最小限で済んだと言っていい。

やがて彼は実力を認められ、年齢から現役を引いた村長からクレーヴェルの姓と（村人の殆どは姓なしだったが、村長家族は姓を持つ習わしだった）、その役割を引き継いだ。ボリスはそれでも、時間を何とか見つけては幼いアリサに構っていた。アリサはそんな優しい叔父が大好きで、いつも彼のそばに居たがった。

ありふれた、それでもかけがいのない幸せを享受して彼女は健康に育っていった。病気にかかったことが結局悪かったのか、身長といい体格といい、痩せ細った食べ物の

カーシャ（粥のこと）ばかり食べている隣人と比べても彼女は少しばかり小柄ではあったが。大人達の仕事の手伝いをしたり、他の子供達と遊ぶことに何らの問題もなかった。

そして、二度目の転機が訪れたのは十五歳の六月の時だった。

3、砂の夢　後編

その老婆が村に現れたのは唐突だった。彼女は突然村の入り口に設けられた監視所にやって来るや否や、大事な知らせがあるから村中の人を集めるようにと伝えた。得体の知れない人間である、警備の男達はどうしたものかと渋っていたが、騒ぎはすぐに狭い村中に広まり自ずと村人達が集まってきた。

丁度その時アリサは村の雑用を手伝っていた。だが、村の周囲の通路の巡回に出ていた叔父のことだと聞くや否や、急いでその場へと向かった。

十分に人が集まったことを見ると、老婆は叔父と彼が率いていたパトロール隊に何が起こったのか話し始めた。彼女曰く、文字通り全滅したと言うのだ。地下世界では何が起こるか分からないのは常識で、パトロール隊が全滅するという悲劇だってあり得たのかもしれない。実際、老婆は叔父の持っていた帽子を証拠として持って来ていた。誰もが半信半疑ながらその言葉を取り敢えずは信じ、そして村の未来を担う男が死んだことに失望していた。

アリサは、目の前が真っ暗になったような感覚に襲われていた。それまで持っていた籠を取り落とし、膝から崩れ落ちる。信じ難かったが、血のついたあの青い帽子は間違

いなく叔父のものだ。出かけた日だっていつも通りだったのに、すぐ帰ると言っていたのに、一体どうして――。

彼女にとって叔父は全能だった。彼は彼女の知らないことを何でも知っていたし、村の中でも誰にも負けないくらい強かった。あの人が呆気なく死ぬだなんて、想像したこともなかった。きっと、それは村人の中にも共有されていた認識だっただろう。

村にとって、これだけで十分な一大事であった。しかしながら、魔女は嗄れた声を張り上げて言葉を続ける。まるで、これこそが本題であるかのように。

「その男は禁忌を犯し、悪魔に呪われた！周りの人間ごと蝕み、闇に取り殺されたのだ！」

そうして老婆は自分がそういうことに詳しい「魔女」であると主張し、その証拠にと人々の目の前で「魔法」を披露すると言い始めた。

「魔法」！地下世界においてそれは都市伝説のようなものでしかない。誰かが聞いた、誰かが見た――そんな噂話程度でしかなく、実際に見た人というのは誰もいなかった。つまり、それは存在しないのと殆ど同じようなものだ。いや、だった。その時までは。

皆が嘘吐きと叫び、巫山戯ていると憤慨していた。しかし老婆が何事かを呟き、手に持つ杖を勢いよく振ると、先端から赤い鞭のような炎が突然噴き出した。大勢がどよめき、後ずさる。そしてその炎がまるで意思があるかの如く地面を舐めるように這い出す

と、言葉を失った。

もう魔女を信じるほかなかった。目の前で証拠を見せられたのだ。一体どのように否定すればいいのだろう。

魔女は全員が静まったことを確認するように周りを見渡すと、もう一度叫んだ。

「呪いはまだ終わっていない！終わっていないのだ！悪魔は未だ血に飢えている。男の血縁者から、その近しいものから、その隣人から……。そうだ！もう始まっている。男の家族はもう呪われているぞ！」

皆がアリサを見た。アリサに叔父しか肉親がいないのと同様、叔父にももうアリサ以外に肉親がいなかったからだ。彼女を見つめる彼らの眼には家族を失ったという同情の心は最早なく、腰の引けた恐れと厄介者を扱うような冷たいものだけが浮かんでいた。

冷水をかけられたような、ぞくっとした恐怖を覚えた。自分の心臓を誰かに掴まれているような不快感。

「呪いの連鎖が起こるぞ！村が滅びるぞ！」

魔女が仰け反り、天井に向かって唾をまき散らしながら絶叫した。アリサは耐えられなくなって、追われるようにその場を飛び出した。実際は誰も追うことはなかったが、それ以降誰も彼女に関わろうとしなくなった。文字通り誰一人、親しかった友達も、優

しかった隣人も、皆離れていった。生まれ育った村に居場所はなくなり、一人ぼっちになった。

アリサはもういっぱいいっぱいだった。叔父を亡くした上、自分もまた呪われているなどと。しかも、それで村に災いを引き起こす？一体どういうことなんだ。

その後は酷い日々が続いた。彼女は実質的に村八分の状態に置かれ、日々の配給も打ち切られた。話かけようとしても、アリサの姿を見るだけで皆逃げていく。積極的に害そうとはしなかったが、それはきっと呪いとやらが自分にも移ることを恐れただけなのだろう。人間はいつだって逸脱したものに容赦がない。それが昨日までの親友であっても、何かが自分たちと違うというだけで十分差別の理由になるものなのだ。何かきっかけがあれば、それは恐れだけでなく悪意や殺意という形で現れるだろう。アリサは彼女なりに気がついていて、恐怖していた。

実際その危機感は当たった。そんな日々が二週間ほど続いたのち、魔女が「呪いを断ち切るには、その小娘―（アリサのことだ）を儀式にかけて殺さなければならない」とか言って、自分を殺そうとしていると聞いた。誰もアリサに話しかけないのだから、それを知ったのは完全に偶然だった。空腹に耐えかね、せめて残飯でも漁ろうと人目を避けて動いていたら、村人がそう話しているのを耳にしたのだった。

話していた人間はどちらもアリサの友達の母親だった。彼女たちも数日前まではア

リサに笑顔を向けていたはずなのに、今では「あんな娘、村のためにもさっさと殺していまえばいい」と恐れと嫌悪の混じった表情で吐き捨てる。

正直なところ、魔女が本当のことを言っているのかは分からない。恐らく村人たちもそうであるはずだ。だが魔女はもはや絶対的な正義であり、価値観であった。

（もしかしたら本当に自分は呪われていて、死ななければいけないのかもしれない……）

アリサはそうも思ったが、ただの村娘である彼女に真実は分からない。分かるはずもなかった。

けれども一つ確かなことはある。どうであろうと関わらず、自分の命を捨てたいとは思わない。自殺願望なんて全く持ち合わせていなかった、ということだ。

だからきっと、そのことを知れたのは幸運だったのだろう。このままでは本当に命の危機がやって来ると思い、その日のうちに皆が寝静まった真夜中に村を逃げ出す計画を立てた。倉庫に忍び込んで物資を幾つか盗み出し、なけなしの食料や水を袋に詰めた。小柄な彼女では多くのものを持ち出すことはできなかったが、どちらにせよ持って行くものなんて殆どなかった。食糧や武器といった重要な物質の殆どは監視付きの別の倉庫に置かれていて、手の出しようがなかったからだ。

村の全ての入り口にはミュータントや盗賊からの防衛のため、武装した男達が詰める監視所が設けられている。本来外からの守りになるものだが、この時ばかりは内側から

も人を抜け出させない障害になっていた。そのまま外に出してもらえるとは思えなかったし、捕まればどうなることか想像に難しくない。

だから本来なら人目を忍んで抜け出すことなど不可能に近かったが、彼女は抜け穴となる通気孔を知っていた。何かあった時に、と叔父が教えてくれたのだった。この抜け道は叔父が子供の時に見つけたらしく、他の誰も知る人はいない。

件の通気孔は村の外れにあり、捨てられた廃材の山に隠れていた。何とか手前のものをどかしてみれば入り口はかなり狭く、アリサが入り込むのも窮屈といった程だった。これならたとえ追手が来たとしても追いつかれることはないだろう。ここがどこに繋がっているか、それはアリサと叔父しか知らないのだから、回り込まれることもない。

最後に彼女は後ろを振り返った。生まれ育った村は寝静まっていて、明かりの光も殆ど無い。今までの思い出——友達と遊んだ記憶や、大人に褒められた記憶——が浮かんだが、それはもう裏切られ、穢されていた。振り払うことは何の苦でもない。むしろ、そんなことが浮かんだこと自体が彼女にとっては苦痛だった。

けれど、一つだけ違かった。亡き叔父の姿を思い浮かべると涙が溢れてきて、アリサはいつかの誕生日に贈られたメダルのペンダントを握りしめる。これももう形見の品だと思うと、どうしようもなく悲しくなってくる。

優しい叔父の記憶だけが、アリサの持つ思い出の中で輝いていた。ただそれだけで、

村に残りたいという未練を生まれさせていた。

瞼を開く。涙に滲んだ視界は暗く、霞んでいて、いつもと全く違って見えた。

それが全てだった。

叔父は死に、その他の人達は自分を裏切った。もうこの村はアリサにとって同じものではなかった。「いつも」なんてものが、もう既に失われて消え去ってしまったことをアリサは理解した。

通気孔に蓋をしていた金網は簡単に外すことができた。そこからは冷たくてカビ臭い空気が流れてくる。外の世界の空気だ。叔父の話の中でのみ聞いて、実際には経験したことのない世界。想像だけの世界。とてつもなく恐ろしくて、とてつもなく広い。

その感覚を感じ取ってか一瞬躊躇したが、恐る恐るながらも一度手を掛けてみれば、大したことではなかったのだと気がついた。身体を縮こませて中に入り込み、出来るだけ物音を立てないよう、突き出している突起で怪我をしないよう、注意しながら這って進んだ。

こうしてアリサは故郷を捨てた。生まれて初めて、村の外へと手を伸ばした。

実際やってみれば、想像していたよりもずっと簡単なことだった。

4、転がり落ちて

初めは薄ぼんやりとした意識だった。

五感の全てに靄がかかり、まるで水の中にいるようで。アリサはふと、生まれる前の胎児の感覚はこのようなものなのだろうか、と考えた。恐らく、二度とは経験するはずのないものだ。

しかし、その心地良いとも何とも言えない感覚が引いていくのに従って、鈍い苦しみが激しくやってきた。先程とは真逆の不快感。

後頭部をハンマーで叩かれたような頭痛、全身を何処かに打ち付けたような痛み、そして単純な寒さ。

次第に鈍痛が末端の神経から頭の芯に響くようなものになり、それに引き摺られて自我が戻ってくる。染色材が水に拡がるように、ジワジワと。それでも身体の状態は最悪で、精神的にも最悪の気分。

どうにもおかしい。それでも意識はまだ薄ぼんやりとしているから、状況が上手く把握しきれない。

昔、高熱を出して倒れた時のことを朧げながら思い出す。タチの悪い風邪でも引いた

のだろうか、アリサは呑気にもそう考えた。
　きっと叔父さんは温かいベリーのお茶を出してくれる。蜂蜜をふたさじ、ピンク色の甘いそれは風邪を引いていなくても子供達は飲みたがる。アリサだってそうだ、甘味など味わう機会は滅多にないのだから。
　眼をゆったりと開けるが、ぼやけた視界が回復するのに暫く時間がかかった。その間、ゆっくりとだが取り戻した理性が認識をまともなものにしていく。視界が明瞭なものになるにつれ、周りの状況がしっかりと見えるだけでなく、それを問題なく認識する力も何とか得た。
　怠い身体を起こし、一度落ち着いて周りを見ると……アリサは自分が全く知らない場所にいることに気がついた。
　ここは少し開けた空間のようで、少し離れたところにある天井に開いた大穴からは、勢いよく水が流れ込んでいた。地面には水が薄く張っているものの、何処かに流れ込んでいるのかあまり深くはない。薄暗いが、壁や天井に張り付いている緑色の淡い光を発するキノコやコケのおかげで周囲はぼんやりと照らされ、周囲を確認する程度ならば十分だ。
　自分の記憶をいくら漁っても、こんな場所に見覚えはない。当然自分の部屋ではないし、かといって村の何処かでもない。

それはまさしく叔父の話の中で聞き、想像しただけの景色の一つ。それが今、現実のものとしてアリサの目の前にある。

（そっか……）

アリサは思い出す。自分が故郷を離れたこと。永遠に思えるような暗闇を歩いてきたこと。そして、ミュータントに襲われたこと――。

色々なことが頭に浮かんでは消えた。しかし何故だろうか、そのどれもがレンズを一枚通したかのように思え、どうにも自分自身ではなく他人事のように感じた。ついこの間までの人格と、今の自分の人格に連続性を感じられない。朧げで、薄薄としていて――そんな不思議な感覚。

一度死にかけて何か吹っ切れたのだろうか、とアリサは思う。死に瀕して人が変わってしまうなど珍しくもないが、現実感がないのもまた当然と言えた。故郷で平和に暮らしていた頃の自分に、今の状況を理解できるはずもない。それと同様で、今となってはかつての日常を信じることができなかった。

鈍痛はずぐずぐと続いていたが、状況を把握して落ち着いた頃には、精神はだいぶ落ち着いていた。いや、むしろ冷めていた。自分自身を一歩引いた目線から見ていた。

あの時、アリサは自分が死ぬという確信を紛れもなく抱いた。受け入れがたい不条理に対する憤りと恐怖心、そういった感情を超えた先にあった一つの悟り。それはきっと

生物的な本能だ。故に、己がまだ生きているということが、正直信じられなかったのだ。運が良かったのか、酷い怪我をしているような様子もない。文字通りこれは夢なんだと思った方が違和感がなかった。

ただ、その運の良さでさえいつまで続くものか。いや、何の意味があるものか。アリサの頭は諦念の感情でいっぱいになっていた。

恐らく、自分は壁を突き破ったあと、運良く何処かの水路に落ちたのだろう。それに流されてここに行き着いた。どれだけ長い間水に浸っていたのか分からないが、全身はずぶ濡れで服もボロボロに擦り切れ、持っていた荷物も殆どを無くしていた。残っているものは首にかけていたメダルのネックレス程度か。形見を無くさなかったことは嬉しいが、これが今の状況に役に立つことはないだろう。

体温はかなり下がっていた。この状況でよく目を覚ますことができたと思う。いや、もしかしたら目を覚さない方がよかったのか。

なにせ希望が何も見えない。無駄に苦しみを長引かせるだけかもしれなかった。

「なら、大して状況は変わらない、よね」

ぽつりと呟く。それは望外のところから現れた考えで、一瞬遅れてアリサは驚いた。

元々絶望的だった状況が更に悪化したところで、大して何も変わらない。最悪が最悪になるだけだ。なら、気にするだけの意味もない。

ふらり、と危なっかしくアリサは立ち上がった。暫く気絶していたとはいえ、体力は殆ど回復していない。生まれたての家畜の如く膝がガクガクと震え、一歩を踏み出すどころか立つことでさえ困難だ。体を動かしたせいか、今まで大量に飲み込んでいた水を咳まじりにゲーゲー吐いた。

だがそれでも、行けるところまで行ってみよう。

気を持ち直したわけではなかった。むしろ、それはある種の現実逃避だったのかもしれない。けれどもここに突っ伏しているよりも身体を動かしていた方がまだ意味があると思い、アリサは取り敢えずこの空間を探ってみることにした。

多くは望まない。期待しない。どうせ裏切られるだけだ。だがもしかしたら、せめてこの寒さくらいは凌げるかもしれない。

??

空洞は広く開けていたが、一本の道のようになっていた。どちらに進めば良いのかは分からないし、アリサは取り敢えず目の前の方向に向かうことにした。ただ、進んではみたものの暫く行ったところで行き止まりに突き当たった。瓦礫が天井から崩落していて完全に塞がれてしまっている。水の流れはそちらに向かっているから、この先にも

空間があるのだと思うが、少なくとも自分が通れそうなスペースは見当たらない。

そして、そこにあったのは瓦礫だけではなかった。端の方に、瓦礫にもたれかかるように座り込んだ人影があったのだ。暗がりだから一瞬人間かと思い、声をかけようと近づいたが、それが半分白骨化した死体であることに気がついた。

殆どかけただけの衣服はボロボロで、残った人体の黒ずんだ片鱗が異臭を放っている。腐敗のせいで顔はぐちゃぐちゃに損傷していて、片目はなくなりもう片方は飛び出ていた上、半分溶けていた。

それだけではない。瓦礫のそばには流れ着いたものと思われる、大量の骨が散乱していた。人間のものだけで何人分かも分からない。それ以外の動物の骨も漂着していて、さながらここは墓場のよう。その中にこの間遭遇した大鼠のミュータントよりも巨大な頭蓋骨を見つけて、アリサは戦慄した。

思わず目を背け、すぐにでも引き返そうとしたところ――アリサは様子を確認するために近づいたため、見えてしまった。死体が手に持っている、銀色に鈍く光る容器が。

それは多分、何かの缶詰だった。恐る恐る、一度は離れかけた死体に近づき、それを手に取ろうとする。死体の指は死してなお容器をがっしりと掴み、指を外すには少し苦労しなければならなかった。結果的に指が二本千切れたところで、アリサは缶詰を手に入れることができた。

こちらも切羽詰まっているからだろうか。死体からものを奪うことに関しては、罪悪感らしきものはあまり感じなかった。どうせ、この人にはもう必要ないものだと思った。しかしそれでも、初めて触れる死体――それも腐ったもの――は、酷く気味が悪かった。

瓦礫にも所々生えている光るコケやキノコにかざして見てみたところ、外装は汚れていて何も読み取れない。代わりに、アリサは容器には爪で削られたような細かな傷や、何かにぶつけたような凹みが沢山あることに気がついた。

どうやらこれは開けるために専用の器具が必要なもののようで――恐らく、あの死体はこれを結局開けることができないまま、飢えか何かで死んだのだろう、と予想がついた。

アリサも何も持っていないのだからこれを開けることはできない。空腹の中、食料らしきものを折角見つけたのに食べられないとは失望する気持ちが大きかったが、なにより自分も現状を何とかしないとこの死体と同じ運命を辿るだろう。嫌な想像が頭に浮かぶ。

結局、収穫はそれだけだったが、完全に徒労だったわけではない。行きよりも少しだけ元気を取り戻したアリサは、今度は反対側へと進むことにした。

だが、反対側も同じようなものだった。少し進んだところで瓦礫が崩落していて、ど

うにも通れそうにない。つまるところ、ここは完全に閉塞した空間だった。

「基盤」自体が相当古いのだから、人の管理の手が及んでいない、居住地から離れた場所ではこういったデッドスペースは珍しくもないという。アリサは叔父からそんなことを聞いたことがあった。そういった場所に入り込んでしまった場合、抜け出すには基本的に元来た場所からになるということも。つまり、この場合は天井――未だに水が流れ込んでくる、五メートルは頭上の穴であった。流石に自力で這い上がることはできない。

あまり大きな空間ではなかったから、体力の続く限りアリサはこの場所の探索を続けた。もしかしたら何が見つかるともしれず、あるいは動くことをやめたらもう立ち上がれないかもしれないと思ったから。

その結果として、アリサは妙なことに気がついた。ここの空間は至る所にキノコやらコケやらツルやらが群生しているのだが――一箇所だけ、不自然に綺麗な場所があった。どういうことか、ここの壁だけ植物が張り付いていないのだ。まるで自分から避けていったかのように、ぽっかりと空白が開いてしまっている。

よくよく見てみると、心なしか表面も他の場所よりも滑らかで、アリサはもしやと思い至った。試しにコンコンと手の甲で壁を叩いてみれば、明らかにここだけ音が違う。

ここの後ろには空間があるのだ。理由は分からないが、ここは元々壁などなく、後々

埋め立てられたのではないか。

すぐに手ごろな瓦礫の塊を幾つか持ってきて、壁を殴りつけ始めた。壁は予想以上に脆く、何度も叩くとやがて手を突っ込める程度の穴が空いた。その先の空間は真っ暗で、こことは違う嫌な空気が流れてくる。湿っぽくて冷たいだけではない、かといって埃っぽいだけでもない、何処か粘つく別のものを感じる。アリサは全身の毛穴を突くような不気味な違和感に、思わず生唾を飲み込んだ。

だが、望みはここぐらいだ。これはまさに目の前に垂らされた、得体の知れない糸。取らないという選択肢はない。

アリサは一瞬だけたじろぎ、またすぐに穴を拡張するべく腕を振り続けた。

三十分ほど作業をしただろうか。穴は今や大きく広がり、アリサ一人が屈んで入ることぐらいならできそうだった。

穴の先は真っ暗で、どれほど続いているのかもよく分からない。こちら側の空間は手元くらいなら見えるほど明るいのだが、その光が全くこの先の空間には入り込まなかった。それは酷く不自然なほどに。光さえこの闇を恐れているように思える。

どうして埋められていたのか。壁の脆さからしても、つい最近になって作られたわけでもなさそうだったが、その間植物は全く寄りつこうとしなかった。

疑問はどうにも尽きないが、進んでみるしかない。もしかしたらその理由が分かるか

もしれないし、何がしら自分の助けになるかもしれない。

アリサは一際強い光を放つキノコを幾らか集めて束にし、松明代わりに持って穴の先の空間に足を踏み入れた。やはりというか光は全く通らず、むしろ濃厚な闇が淡い光を吸収しているように見える。

明らかにこの場所はおかしい。嫌な予感がする。叔父からですら、こんな場所の話は聞いたことが一切なかった。

闇にはもう慣れたと思っていた。あれだけ長いこと真っ暗な中を歩き続けていたのだから。けれども今のアリサは暗闇を歩き始めた始めの時と同じくらい、この闇の中を進むことに躊躇していた。

あの慣れ親しんだ暗闇とは何かが違うのだ。それはどうしてか理解していた。けれども、肝心のその何かの正体なぞは、アリサに皆目見当がつくはずなかった。

5、異形　前編

穴の先には目印になるようなものもなく、自分が真っ直ぐ進んでいるのかも分からない有様だった。

トンネルを進んでいた時は、横幅もそれほどない場所だった。だから最悪壁に手を這わせていればなんとか前に進むことができた。しかしここは横幅もかなり広く、まさに大空洞と言っても差し支えがないほどがないのではないだろうか。

光が殆ど足元程度しか照らせないため目は効かず、実際の大きさは全く把握しきれない。それでも、足音は何処か遠くの方まで反響して響いている。

「誰か、いませんか――！」

不安感からアリサは大声で呼びかけてみた。声は足音と同じように反響し、エコーのように繰り返しながらか細く消えていった。

当然、返事が返ってくることがない。期待もしていなかった。

歩き続ける。上っているのか、下っているのか。

不意に、何かが足に当たった。いや、何かに引っ掛かった。

何だろうと思い、足元を光で照らしてみて――アリサは言葉を失った。

それは、人間の形をした何かだった。地面に伏した胴には太い筒状の金属杭が突き刺さり、タイルの床にそれを縛り付けている。

長く、真っ白な白髪はアリサに骨を連想させた。色素が異常なほど薄い腕なんかは干からびて、萎びれている。一見人間のように見えるものの、古びた黒いコートの下からは何本もの虫のような脚が伸びている上、アリサの胴ほどはありそうな尻尾が生えている。肌や髪の色とは違い、サビのような、あるいは肉のような赤茶色。白髪の中には歪な形をした角や、尖った耳さえ見えた。

ミュータント。思い浮かんだのはその言葉だったが、これほど人間に似た種類は聞いたことがなかった。あるいは新種なのだろうか、それにしたって不思議で不気味だ。

下半身や一部の身体的特徴は人外のそれのものの、上半身だけなら殆ど人間のもの（恐らくは女性だ）で、それこそ人間に別の生き物の特徴を貼り付けたような――そんな、歪な生き物。

（もう死んでる、よね……）

その異形は明らかにミイラ化していた。外にあった人間の死体のように腐敗はしていなかったが、萎びれたそれは明らかに生きてはいまい。

（あれなら、もしかして……）

異形に少しばかり注意は引かれたが、それが死んでいるならばどうでもいい。そんな

ものよりアリサの目に止まったのは、ミイラを突き刺している錆びた杭だった。
先端はかなり尖っていて、槍のような印象を受ける。少々大き過ぎる気もするが、アリサはあれを使えば先程拾った缶詰に穴を開けることもできるのではないかと考えた。
ミイラから杭を取り除こうとするが、骨か何かに引っかかっていたのかもしれない。中々上手く取り除くことはできず、左右に捩ったり捻ったりしているうちに勢い余って手が滑り、錆びてボロボロになった表面で手の平が切れた。
「痛ッ……」
血が飛び散り、ミイラや床に降りかかった。鋭利でもないもので切れたせいで、切ったというより抉れたというに近かった。傷はあまり深くはないが、それでも痛いものは痛い。ただ、その苦労もあって杭を取り出すことができた。
缶詰を床に置いて足で押さえ、蓋の部分に先端を押し付ける。何度か体重をかけてみれば、ブシュッと汁が漏れる音と共に貫通した感覚がして穴が空いた。ぐりぐりと捻って穴を大きくする。
はたして、中身は豆のスープだった。一体いつのものなのか分からないし、色も少しばかり黒ずんでいる。
ただ、匂いは酷くない。少なくとも腐ったりはしていなかった。手の平を切っていない方の指を突っ込んですくい、一口食べてみる。味も悪くなかった。なにより久しぶり

にありついた食事だ。元々大して美味しくもないスープなのだろうが、それでもこの時ばかりは今まで食べたどんなものよりも美味に感じた。

自然と涙が溢れてきた。一言も発することなく、ただただ目の前の食べ物に集中していた。

だからだろうか、アリサは目の前の缶詰の中身がなくなるまで、自分の周りの異常に気がつかなかった。

――ぴちゃ……ぴちゃ……。

自分の後ろから水音が聞こえた。何かを舐めるような、そんな音。はっとなって振り返るが、この暗い空間ではその先に何がいるのかなぞ分からなかった。

それでも、そこには何かがいるのだという確信を受けた。

――かちかち……ぎちぎちぎち。

音が近づいてくる。

最早言葉は上げられなかった。喉元を締め上げられた――実際はそんなことはなかったが――ような感覚があり、声どころか呼吸さえまともにできなかった。

闇に二つの光が浮かび上がった。赤い、緋色の光。一瞬遅れて、それが眼だということに気がついた。射通すような視線が、こちらをじっと見つめていた。

ずい、と影がこちらに身を乗り出してくる。

それは先程のミイラだった。だがそれは最早干からびてなどおらず、生気をまるで感じさせない白い顔をこちらに向けていた。

開いた口は耳まで大きく裂けていた。下顎は複数に鋭く割れていて、虫の口器のような構造を覗かせている。二股に分かれた細長い舌をちろちろと蛇のように扱い、床に落ちたアリサの血痕を舐めとっている。

アリサはまだ傷の止血をしていなかったことに気がついた。

もしや、血の匂いに反応したのだろうか。思い至って傷口を服で拭おうとするが、どう考えてももう手遅れだった。

異形はずりずりと床を這ってアリサの元にやって来る。その動きは怠慢なもので、その場を走って逃げれば追いつかれるはずもないものだった。だが、アリサは身体が石になったかのようで指一本動かすことができなかった。

そんな内に床に放置していた杭を異形が尻尾で払い、視界の外に消えていく。唯一の武器らしいものは失われ、化け物がすぐ目の前に近づいていた。

――からから、くるくる。

喉を鳴らして顔を近づけてくる異形。アリサの顔からすぐそこに異形の青白い顔がある。吐いた冷たい息が顔にかかった。味見をするかのように、細長い舌が頬を舐めねぶる。

それはまさしく怪物だった。化け物だった。異形だった。あるいは――一体どのように表現すればいいだろう。アリサの頭の中に、その冒涜的なナニカを形容する的確な語彙が浮かぶことはなかった。

恐怖、嫌悪、忌諱……。色々な感情が鬩ぎ合い、頭の防波堤を超えそうになる。

目の前の視界が狭まっていく。淵を黒が塗り潰していく。瞳孔が収縮し、見開いた眼からは液体が流れ始める。心臓が痛いほど強く肋骨を叩いているのに、酸欠に陥ったかのように息苦しい。身体が痙攣している。肉体が、精神が、目の前の存在に犯されている。

遠くなる意識の中で、アリサは辛うじて言葉を紡いだ。

「あなた、私を食べる気なんですか」

譫言だった。本当に発したかどうか、自分自身でも分からない。自らの耳にすら届いたか分からない、絞り出したかのようなか細い言葉。

しかし、アリサは間違いなく返答を聞いた。

「いイや」

気がついた時には異形は顔を遠ざけていて、代わりにアリサの出血した掌を舐めていた。

どれだけ間、意識が遠い場所に行っていたのだろう。時間感覚は完全に狂ってしまっ

ていた。かなり長い間明瞭な意識が消えていたような気がするし、かといって実際は一瞬だったのかもしれない。

「あまイ……」

ぽつり、と嗄れた声が響いた。アリサは口を開いていない。ならば、この空間では言葉を発する存在は目の前の異形以外の何者でもなかった。

何故だが、最早嫌悪感というものは感じなかった。恐怖というものも消えていた。あるいはそれが限界を超えてしまったが故か。

アリサの精神はどうしたことか正常なものに戻っていた。それどころか、目の前の異形が何処か儚くて脆いものにさえ見えてくる。

どうやらこの化け物はいきなりアリサのことを食べてしまおう、というわけではないようだった。暫くして口を離し、その赤い眼でアリサのことを見つめてくる。その中に敵意や害意というものは感じられない。それどころか、それは人生の中で見たことがないほど純粋な視線だったかもしれない。

手の平を見る。異形がついさっきまで舐めていたからか唾液に汚れ、薄暗い光の中でてらてらと光っていた。が、間違いなく出血は止まっていた。傷口さえ見えず、怪我をしたことが嘘なほど綺麗になっていた。

一体どういうことだろうか。こんなすぐ治るほど浅い切り傷というわけではなかっ

た。この異形に舐められたせいで治ったのだろうか、そういう予想に行き着くのは当たり前のことだった。
「あなたも、一人ぼっち？」
自然と声をかけていた。
異形は首を傾げるだけで返答しようとはしない。だが、表情や顔色は明らかに理性のそれを浮かばせていたし、言葉を理解していないわけではいなさそうだった。
ただ純粋にどういう意図なのか分からない、という様子だった。
「私、アリサっていうんです。あなたはなんて言うんですか？ここに、ずっと一人？」
言葉を変えて聞いてみる。放たれた言葉を噛み砕いているのだろうか、ややあって異形は返答を返した。
「ナマエ……はなイ。ソう、ずっとヒトリ」
「はは、じゃあ私と一緒。二人ぼっちですね」
そう言うと、異形は何処か困惑した様子を見せた。
「ふタり……ぼっチ……ふタりぼっチ……」
二人ぼっちという言葉を連呼しながら頭をゆらゆらと揺らす。その姿はアリサよりも歳上のものに見えるのに、どうしてか子供の仕草のように思えた。
「……疲れました。少し寝させてください」

未だに連呼を続ける異形の横でアリサは身体を伏し、横になった。太い尻尾に背中を預けるような形だ。異形の身体は冷たかったが、それでも久しぶりに感じる自分以外の体温に少しだけ安堵した。

この得体の知れない異形に襲われるかもしれない、という不安感はなかったわけではない。冷静に考えれば、何故自分が未だにこの妙ちきりんな生き物から逃げないのかよく分からなかった。

けれども疲労感は強く、加えて少しは腹を満たせたことから眠気は争い難いものになっていた。

目が覚めた時には、異形は側から消えていた。

??

結局、あの後もこの場所から脱出する方法は見つからなかった。

あの異形がいた空間だけは広過ぎて探索しきれていない。闇の深さから来た方向が分からなくなり、遭難する可能性が極めて高かったからだ。

だが、少なくともあの大穴を抜ける方法は見つからない。瓦礫を少しずつ積んでいけばあるいは、とも思ったが、大穴からは絶え間なく水が流れ落ちてきている。ある程度

までなら可能だろうが、恐らく崩されてしまうだろう。
あるいは通路の両端を塞いでいる瓦礫の山を取り除けばここから抜けることはできるかもしれないが、それにはかなり長い時間が必要になる。
そうなると、この閉塞された空間で暫くの間生き抜かなければならない。水の問題はないが、食料に関しては大問題だった。群生している光るキノコやコケ、あれは食べ物にならない。人間にとってはむしろ有毒なものなのだ。
この間の缶詰のようなものが見つかれば一番良いのだが、あんなものはそう滅多に手に入らないだろう。
火が手に入らないのも大きな問題だった。燃やせそうな廃材は多く流れ着いていたから、マッチなりライターなりあれば暖をとれただろう。だが荷物は流されてしまったし、そもそもそういった明かりになるものは使い切ってしまっていた。
この空間は「基盤」の中でも相当深いところにあるのかもしれない。水が流れているのだから気温が低いのは当たり前だが、それにしても耐えがたい寒さがアリサの体力を蝕んでいた。
「基盤」は地下深くまで根を張っている。地上に近い上層は侵入してくるミュータントや汚染の影響が酷く、人類はあまり居住地を構えていない。主に人類の生息圏であるのは中層であるが、その下にも空間は広く、深く続いている。下層、深層と呼ばれる場

所だ。ここまで来ると浸水や崩落、ガスの問題が激増し始める。当然、そんな場所に人類の手は殆ど伸びていない。

アリサは自分がこの階層にまで落ちてしまったのではないか、と考えていた。もしもそうだとすればここから元々の目的である何処か別の居住地を目指す、というのは遥かに困難に思えた。

だが、だからといって諦めてしまうわけにはいかない。本来なら絶望し、自殺さえ選ぶかもしれない状況の中だったが……魔女に追われ、故郷を捨てた時の経験がアリサに生への異常な執着心を植え付けていた。

絶対に、絶対に死んでたまるものか。それだけの一心で、殆ど執念だけで、アリサはなけなしの生にしがみ付いていた。

ある時、例の異形がまた姿を現した。あれ以来彼女は姿を見せていなかったが、今回は口に大鼠のミュータントを咥えていた。

ちょうどその時アリサは瓦礫を撤去するがてら何か使えそうなものがないか崩落した山を漁っていたが、突然真横にミュータントの死体がぬっと現れたので死ぬほど驚いて飛び退いた。

一度そいつの同族に殺されかけたのだ。トラウマや恐怖を感じるのも仕方ないところだったが、そんな様子を知ってか知らずか、異形は死体を落としてアリサに平坦な声

で告げる。
「あげル」
「え……いや……」
　アリサは困惑した。
　一応彼女に自分をどうこうしよう、という気はないのは理解しているが、それでも何かくれたりするような関係ではないとも理解していた。
　もしかして懐かれたのだろうか、アリサは考える。考えて、尋ねた。
「どうしてこんなのくれるんですか？別に私、何もしてませんよ」
「……オマエは、ボクをタスけタ。あの、イタいノをヌいてくれタ。だかラ、あげル」
　辿々しく言葉を紡ぐと、背を向けてのろのろとあの闇の空間に去っていった。声をかけようとしたが、彼女は振り返ろうともしなかった。
　大鼠の死体を見る。半分はあの異形が食べたのだろうか、齧られていて内臓が若干溢れていたが、それでも十分大きいと思うほどでっぷりと太っていた。
　アリサは当然空腹だった。あの缶詰以来、何も食べていないのだから。だが、だからといって大鼠のミュータントをまるごと食べられるわけでもない。
　こいつは人間が食べられる生き物ではある。実際、アリサも村にいた時に何度か食べたことがあった。地下世界では貴重な肉の一つとも言えよう。だが生臭いのは酷いし、

噛み切るのも大変なほど繊維が固かった。

なにより、アリサは肉を焼く火がないのだ。異形はこんなものを生で食べられるのかもしれないが、人間のアリサにはかなり難しい。それはただのゲテモノで、危険な行為だ。

（いや……流石に無理……）

少し考えて、この鼠は放置することにした。空腹は辛いが、こんな状況では病気にかかるのも恐ろしかった。

6、異形　後編

アリサは一人、水の上がってこない瓦礫の島の上に座り込んでいた。

ここに閉じ込められてからそれなりに時間も経った。通路を塞いでいる瓦礫をなんとかできないかと作業をするばかりで、他にできることなんて何もない。疲れたら眠るだけの、生活とすら呼べない活動を送るばかり。

トンネルを歩いていた時と同じように思えるが、体力はその時ほど消耗しない。この場所にも慣れてきて幾分か頭もまともに動くようになってきた、そんな時のことだった。

――あれは一体どういう生き物なんだろう。

考えるのは、やはり例の異形のことだ。彼女は一度お礼と言ってミュータントの死骸（半分齧られたもの）を持って来はしたが、また暫く姿を見せていなかった。

もしかして自分は夢を見ていたんだろうか、そんなことさえ思った。人語を話す、上半身が人間の女性の姿をしたミュータント。それはもう噂話どころか、伝説か何かの話だ。叔父から聞いたことはないが、もしも聞いたことがあったとしてもお伽話の類だとアリサは思っただろう。

アリサは外の世界に関して全くの経験がない。村の外に出ることさえ殆どなかったのだから、それこそ他人から聞いた話が全てだ。その中には確実に作り話だろうというものもある。けれども、それを全部鵜呑みにするほどアリサは馬鹿ではないし、彼女が疑うことを知らない純粋な人間というわけでもない。例えば魔法の話なんかがそうだった。魔女を自称する本人が現れなければ、今でも実在を信じることはなかっただろう。

それに――水で空腹感を紛らわせることはできるが――体力は自覚できるほど日々減衰していく。そんな中では、自分が幻覚を見ていたのではないかと思えてしまうのも当たり前のことだった。

それでも、目の前に明らかな証拠がある。手をつける気が起きず、腐り始めて不快な臭いを発するミュータントの死骸が視界の端に転がっていた。

異形の緋色の眼が頭に浮かぶ。切れ長で、爬虫類のような、人間のものとは明らかに別の瞳。じっと見つめられた時のことをアリサははっきりと覚えている。

あの時は恐ろしかった、と思い返す。彼女との遭遇の第一印象ははっきり言って最悪だった。しかし、同時に意外なほど綺麗だと思ったことも覚えている。暗闇に浮かぶ緋色は宝石のようで、メラメラと燃える火のようで……そして、深みのある暗さを宿していた。

吸い込まれるような感覚があった。気が遠くなるような感覚があった。それは紛れもなく事実で、思い出してしまえばそれが幻だったとは全く考えられなくなった。

ふと気がつくと、目の前にその緋色の眼があった。突然のことにアリサは驚き、そのまま後ろに勢いよく倒れた。

前回もこうだった気がする。どうにも、アリサはこの異形と出会うことに慣れない。

「……ダイジョウ、ブ？」

「え、えぇ。気にしないでください……」

軽くぶつけた後頭部をさすりながら、アリサは苦笑いして答えた。

物思いに沈んでいたからだろうか、近づいてくるのに全く気がつかなかった。ただ、それを加味しても彼女は神出鬼没で、現れるタイミングに前兆がない。

彼女は抱えていたものを落とした。どさり、というかどちゃり、という水っぽい音がする。やはりというか彼女はまたミュータントの死体をアリサの元に持ってきた。その半分は無くなっていたが、それでも残った形から蜘蛛のミュータントか何かだろうと想像がつく。この間の大鼠よりは随分と小柄だが、それでも箱くらいの大きさがあった。毒毒しい見た目だが、異形は大丈夫なのだろうか。

気持ち悪い。アリサは口には出さなかったが、それでも心の中で毒づいた。

その心を知ってか知らずか、異形は前回持ってきたが完全に放置されていた鼠の死骸

を一瞥して、アリサの顔を見た。
何か言いたげな様子だった。
「な、なんですか?」
「……タベなイ?」
「食べないというか、食べれないんです。人間(ヒト)はミュータントの生肉なんてそのまま食べられないんですよ」
相手を刺激しないよう、できるだけ優しくアリサは言った。
幾ら自分にとって意味のないものでも、向こうからしてみればこれはアリサに対する贈り物のようなものだ。相手の好意を無碍にしている自覚はあり、それで怒りでもしたら一体どうなるか。
人間は理解できないものを恐れる。それは故郷で酷い扱いをされた時に気がついた事実だが、アリサ自身も例外ではない。異形をよく理解していなかったし、故に未だ恐れていた。
「ドウいうノだったラ、タベられル?」
「火があれば焼いて食べられる……と思います。ただここには生憎と火起こしできるものがないのでどうしようも……。ていうか、火が何なのか分かりますか?」
「ヒ……わかル……」

何というか虚な返事だった。本当に分かっているのだろうか、アリサは訝しみながらもこの前の缶詰の容器を見せた。当然中身は空っぽだが、どうにもアリサはこれを捨て切れないでいた。

「あるいは、こういう容器に入っているものだったら食べられると思います」

そう言うと、異形は今度ははっきりと頷いた。

「わかっタ。ミつけたラ、モってクル」

そして、またずるずると足を引きずりながら去って行こうとする。

「あ……ま、待ってください！」

アリサは殆ど反射的に呼び止めていた。自分でも驚くほど大声を上げていた。この間は困惑もあったし、振り返るそぶりも見せなかったからそのまま行かせてしまった。が、今度こそ異形は立ち止まり、こちらを振り返った。

「……？」

異形はいつも人間味を感じさせない表情をしている。人間でないから当たり前なのかもしれないが、彼女の冷ややかな顔から感情を読み取るのは難しい。そもそも感情なぞあるのかもアリサには分からなかったが、今の彼女は首を傾げ、明瞭に不理解を示していた。

「あの……もう少しだけお話、しませんか？」

そう言葉がさらっと出てきたのは、アリサの意図するところでは正直なかった。

アリサは寂しかったのかもしれない。異形が離れていく時に、一抹の哀しさを覚えた。彼女に対して恐れを抱いていたのは事実だが、だとしてもまた一人にされるのは嫌だった。

故郷を離れ、知らない場所でただ一人寒さと空腹に震える自分がどれほど惨めに思えることか。アリサはこの時、自分でも言葉にできず、理解し難い感情の渦に巻き込まれていた。

「どうシテ?」

「あの……えっと……」

何故と聞かれると、今度は言葉に詰まってしまった。

寂しいから、とは言えなかった。恥ずかしいからというより、本当に自分がそう感じているのか自信がなかったから。だから代わりにこう言った。

「あなたのこと、もっと知りたいんです」

少なくとも嘘ではなかった。アリサは彼女のことを何も知らない。彼女のことをもっと知りたい、そう思ったのだ。

「……ボク、シャベるノ、ニガテ。それデ、いいのナラ」

「ええ、勿論!」

異形が了承してこちらに戻ってくると、心が少し温まったような気がした。欠けていた何かが埋まるような気がした。

それから、アリサと異形は色々なことを話した。

異形は言葉が辿々しいから、基本的に話すのはアリサの役目だったが。久しぶりに誰かとまともに会話することができて、何処か救われたような気にすらなった。

まず彼女本人について色々と尋ねようとしたが、彼女は自分でもよく分かっていないようだった。自分がどうしてここにいるのかも分からないし、自分が何者なのかも分からない。ただただ痛かった、辛かった、と言うだけだ。どうしてあの空間で杭に打ち付けられミイラ化していたのかは分からず終いだったが、今はあの空間で一人彷徨い、たまにいるという獲物―（ミュータントのことだろう）を狩って食べているらしい。姿を見ないのはそういうことだった訳で、彼女はその一部を持ってきていたということだ。

代わりに、アリサは自分の身の上の話をした。叔父の話をした。魔女の話をした。辛い冒険の――冒険と言えるほど勇敢でも、輝かしくもない惨めなものだったが――話をした。

異形はちゃんと話を聞いてくれた。どうにも彼女は淡白でアリサを慰めたりはしなかったが、それでも誰かと話ができるだけでもアリサにとってはありがたかった。

暫くすると、異形は腹を鳴らした。くるくると喉を鳴らし、先程自分が持ってきた死

骸に手をつけ始める。また耳まで裂けた口を大きく広げ、分かれた下顎で固定し、奥にある鋭い牙で肉を解体していく。彼女が蜘蛛を貪り、口元からグジュグジュと汚い汁が垂れるのから目を逸らしながらアリサは尋ねた。

「あれだけ食べているのに、まだお腹が減るんですか?」

もしかしたらただ単に燃費が悪いだけなのかもしれない。アリサの疑問に含むところは何もなかった。だが一度口を離すと、異形はこう答えた。

「……ハラ、ぜんぜんフクれなイ。オイしくもナイ」

美味いかどうかは置いておいておこう。が、結構な量を食べているはずではないか、とアリサは思った。

異形の身体は小柄なアリサと比べれば一回りか二回りほど大きい。巨躯とまではいかないが、それでも十分長身だ。だが、それでもその程度。食べているミュータントの大きさからして、その量は十分な量を大幅に超えているように思えた。

この類の生き物に自分の常識は通じないのだろう。未だに足を引きずっているところから見て、やはり完全に回復しきっていないのだろうが……それでもミイラ同然の状態から、すぐ動けるまで回復したというのは異常としか言いようがない——と考えて、一つアリサは思い至った。

あの時、異形は少量とはいえアリサの血を浴びていた。その後傷口から流れた血も舐

めていたのも思い出す。
その時の回復はおかしいほど早かったが、今はどうだろうか。十分食べているだろうに。その差が気になった。
――血、それも人間の血は彼女にとって全く別格の食料なのではないだろうか。
その考えが頭に浮かんだ時、背筋に冷たいものが流れた。
明らかに肉食である相手が――それも人食いの類らしきものが――自分に襲いかかってこないという保証はどこにもないのだ。
だから、アリサは自分に言い訳をついた。
血を飲ませて異形が腹一杯になるなら、自分が襲われる可能性も減る。たとえ、もしも自分の仮説が間違っていたなら、そうと分かるだけでも十分な儲け物だと。
確かめる為と自分を納得させ、アリサはこんなことを口にした。
「そうだ、血……少しくらいなら、あげてもいいんですよ」
「……いいノ？」
「ちょ、ちょっとだけですからね！あと、痛いのもできるだけやめてください」
そう言ってアリサは手を異形に差し出す。
彼女は遠慮がちに手を上げると――バキバキと何かが折れるような音がして、腕が肘のあたりから分かれ始めた。骨だろうか、白いものが露出している。まるで元々そうあ

るべきものであったかのように、折り畳まれていたものを展開するような様子で腕の変化が　進んでいく。予想もしていなかったことにアリサは絶句したが、そのうちに彼女の左腕は鋭い鎌のような形状になっていた。

異形はその鋭利な先端でちょんとアリサの手の甲に傷をつけた。ぴり、と少しだけ痺れるような感覚がしたが、その恐ろしい外見に反して、できるだけこちらを傷つけないようにする仕草が感じられた。

長い舌を器用に使い、ぺろぺろと手の血を舐めとっていく。その姿は何処か背徳的で、退廃的だった。

彼女は確かに化け物だし、口なんてまさにそんな感じに変化させることができることは知っていた。だが、大物のミュータントを仕留めるだけの強さの出所が何処なのかは分からなかった。

彼女はやはり、正真正銘の怪物なのだ。

少しだけ彼女との距離が縮んだと思っていたアリサは、また引き離されてしまったように感じた。

だがそれは事実なのだろうか。人間と、それ以外。ただ単にアリサが自覚していなかっただけで、自分達は元からどうしても相容れない関係なのではないだろうか。

アリサには答えが分からない。少なくとも、今はまだ。

鎌に引っ掻かれた傷は別段深くもなさそうだったが、やはり彼女に舐められているうちに塞がっていた。

??

それから、異形はしばしばアリサの血を飲みたがる素振りを見せるようになった。あの鎌をアリサに向かって振り下ろすのに躊躇するのは本当らしく、実際襲い掛かることはない。代わりに、そういった時は頭を擦り付けてはアリサの指を舐めるような仕草をする。押し付けられる角が痛いが、その仕草はまるで甘えているかのようで可愛げがあった。

アリサも彼女が血を欲しがる時には、特に嫌がることもなく与えた。最初はやはり恐れというものがあったが、それも何回も繰り返せば薄れやがて消えていった。

奇妙な関係が異形との間にでき、会う機会が増えると、じきに彼女の呼び方に困るようになった。まさか異形などと呼ぶわけにもいかない。迷った挙句、アリサは彼女をベラ（古い言葉で「白」のこと）と呼ぶことにした。真っ白だから、という非常に安直な理由付けだったが、本人が受け入れたから彼女はベラということになった。

ベラ自身はどうでもいいということなのだろうか、あまり反応はない。ただ、名前を

決めた時には薄く微笑んでいたような気がする。最初はあの顔から表現を読み取るのが難しかったが、最近は少しだけ分かるようになったのだ。

たとえ勘違いであったとしても、ベラというのが自分だということは理解しているならば、全く問題はないだろう。

そしてやはり、ベラは血を与えられるようになってすぐにまた驚異的な回復能力を見せ始めた。せいぜいが軽い出血の分程度であるのに、アリサが血を与えるのに慣れる頃には異形の身体は殆ど完全に回復していた。

アリサは自分の予想が当たっていたことを確信していた。

ベラに舐められると傷がすぐに治るというのも、彼女の回復能力が作用しているのかもしれない。が、こればかりは何とも分からなかった。

回復したベラの様子は随分と変わっていた。剥き出しの肉のような色をしていた脚や尻尾には白い甲殻が薄っすらと張り付き始めており、前のように足を引きずって歩くようなこともない。蜘蛛のように脚を使い、かちゃかちゃと素早く動くこともできる。同時に、「狩り」の成果も一気に増えた。（ベラは未だにその一部をアリサの元に持って来ていた）

その成果も多岐に渡るようになった。最初はそれこそ鼠や蜘蛛のミュータントが殆どだったものの、最近では別種のミュータントも仕留めて持ってくるようになった。基

本的に一匹だけ彷徨いているのを見つけてきているようだが、その殆どが本来は巣を作り群れるものだ。

当初はあまり気にしていなかったものの、出所に関してアリサは疑問を持ち始めた。あんなものは何処にでもいるものだし、一匹程度のはぐれだとすれば大したことではない。実際、アリサがここに落ちる前に遭遇したあの大鼠ははぐれだったに違いない。が、それにしてもベラが狩ってくるミュータントには不可思議な点が多い。あんな、何もないただだっ広いだけの場所に元々生息していたとは考え難いのだ。

もしかしたら、あの暗い闇の空間はここのように何処か別の場所に繋がっている穴があるのではないか。そして、ミュータントはそこから中に迷い込んできているのではないか。

ベラに確認してみたところ、現状彼女はそういう出口を見つけてはいないらしい。憶測でしかないが、もしかしたら脱出できるかもしれないという望みがあるのとないのでは大違いだ。

しかしながら、そういった精神的な希望が湧き立つ反面、アリサの身体は日増しに弱っていった。まさに絶好調のベラと殆ど対象的なほどに。ただ、こればかりは当たり前の話で、何も食べていないのだから当然のことだった。

そのため、ここ最近はできるだけ動かず、体力を温存することを決め込んでいる。こ

のままだと、最終的にベラの持ってくる死骸に口をつけなければならない日がやってくるだろう。できるだけ避けたいことはやまやまだが、背に腹は変えられまい。

あるいは、今度はもしかしてベラが自分の食べられるものを見つけてきてくれるかもしれない。どうやら彼女は何も食べない自分を心配しているようで、色々なものを持ってきていた。狩るミュータントの種類が増えたのは彼女が回復したからでもあるが、(自惚でなければ)アリサの為だ。だとすれば非常に嬉しいことで、もう少しだけ自分の死期を先延ばしにすることができる。

アリサは自分が弱っていくのに伴い、ベラへの依存がどうしようもなく深まっているのを自覚するようになった。

それは、今まで気がつかなかっただけで。あるいは気がついても無意識に目を逸らしていたことで、何も最近になって芽生えたものではない。きっと、彼女と初めて出会った時には既に前兆があった。ぽっかりと空いたアリサの心のスペースには、それが急速に育つだけの土壌があったのだから。

これでいいのだろうか、何度も自問自答した。相手は得体の知れない異形の生物。言葉が通じるからと言って、人間の論理が通るとは限らない。そんな相手を信頼していいのか。アリサには全く分からなかった。決断ができなかった。

だが、どうしようもないじゃないか、という感情がアリサの理性的な部分を押し潰さ

んという勢いで流れ込んでくるのも事実で。
このままここで一人朽ちていくだなんて想像もしたくない。そんなことは絶対に嫌だった。
死にたくない、死ぬのが怖い。それは当然の話だ。だがただ単純に死ぬことより、一人で人知れず死んでいくことの方が、よっぽど最低の話に決まっている。
何でもいいのだ。せめて、自分の側に誰かいて欲しい。一人になりたくない。それが今、アリサの抱える最大の願いだった。
故に、ベラにかけ始めた思いは一際強いものだった。
彼女を信じたいと思った。どうせここから出られないなら、時間はたっぷりある。どんな懸念があったとしても、後に回すことくらいはできるはずだ、と。
だから、せめて今だけは。今だけは信じていいのではないだろうか。
けれども、アリサは自分の弱さと甘さをすぐに後悔することになった。
何も裏切られたわけじゃない。勝手に期待して、勝手に失望しただけ。酷く身勝手なのは自分の方だ。
ベラに対して憤りや悲しみを感じるというより、むしろ愚かな自分自身を嫌悪した。
次にベラと会った時、彼女の姿は変わり果てていた。鎌の形状になった腕はそれこそ塗料に浸したかのようにドス黒い赤に染まっている。口元や着ている黒のコートにも

赤が撒き散らされていて、汚れていない部分は殆ど見えないほど。

もう片方の変化していない腕にはズタズタに裂かれたナップザックのようなものを持っており、口には人間の腕らしきパーツを咥えていた。

腕が落ちる。

目の前が真っ白になった。

7、代償

「……それは」

遠くなる意識の尾を必死で掴み取り、アリサは口を開いた。それはベラに対して物事を尋ねるというより、彼女に声をかける以上の意味合いを持っていなかった。

顔面は蒼白で、口元は引きつっている。一体どんな顔をすればいいのか、アリサには全く分からなかった。

対照的に、ベラはいつも通りの無表情。人間離れした白い顔にシワ一つ寄せずに答える。

「いつもドオリ、カッて、キたモノ」

違う。違うのだ。そんなことが聞きたいんじゃない。アリサの心中は暗澹としたわだかまりの濁流が支配し、煮詰められつつあった。

それなのに、その一端でさえ表現する手段が思いつかなかった。怒り、悲しみ、失望、絶望。そんな陳腐で凡俗な言葉が当てはまるとも思えない。この感情は一色ですらなかった。言語化するのは著しく困難で、何と言えばいいのかさえ分からない。

「それはどうしたんです」

それ、という言葉に強い力をかけた。
地面に落ちた、棒状の肉塊。アリサだってあれが何なのか分かっている。余程の馬鹿でない限り、頼んでもいない脳が無理やり教えてくる。
だが、それが一体何なのかアリサは口に出したくなかった。理解したくなかった。
その持ち主が今頃どうなっているか、確信に似た予想が頭に浮かぶにも関わらず。
ベラはそんな様子のアリサがよく理解できないらしく、
「コロしタ」
それが一体どうした、といった顔であっけらかんと告げた。
「ヒトは、コロすのがムズかシかっタ。コレは、タべられル?」
その言葉にアリサは自分の耳を疑った。
「食べ、食べられるか、ですって? 食べるわけないでしょう。人間（ヒト）は人間（ヒト）を食べないんです、同族を食べるなんてことはしないんです！」
最初はか細いだけの声も、最後には怒鳴りつけるようになっていた。アリサは彼女の前で怒鳴るようなことを一度もしたことがない。それは体力の問題でもあったが、そんな機会が今まで一度もなかったからだった。
怒鳴りつけられたベラは何の反応も返さない。アリサは顔を上げることができなかった。彼女がどんな表情をしているのか、知りたくなかった。知るのが怖かった。彼

女の気配は動かない。不自然なほど止まっていて、アリサにはそれが恐ろしく不気味に思えた。

「……なんで、私は殺さないんです」

何とか絞り出したのはそんな問いだった。どうしてそんなことを聞いたのだろう。自分は殺して欲しかったのだろうか。あるいは――アリサにも分からない。

「オマエは、アリサ。ボクをタスけタ。ドウして、ころス？」

彼女の返した答えは以前聞いたものと殆ど同じで。けれども理解した意味合いはその時と違い、酷く絶望的なものだった。

きっとそれが、それこそがベラが異形の生物たる所以なのだ。

牙でも角でも、あるいは尻尾でも鎌でも脚でもない。それは価値観という、異種族間に広がる巨大な隔たりだった。

言葉が話せるからといって、理解し合えるわけではない。そんなことアリサは理解していたつもりだった。だが、つもりでしかなかった。

アリサは今度こそ理解した。

自分が襲われないからといって、別の人間が襲われないというわけではなかったのだ。

アリサはベラという人間でない存在を目の前にした時、自分自身のことを「アリサ」と

いう個人ではなく「人間」という種族の括りで捉えるものだと思っていた。実際、そう考えるのも無理はなかったのかもしれない。

だが、それは大きな間違いだった。致命的な思い過ごしだった。

ベラはアリサを「アリサ」という個人として見ていて、アリサを「人間」として見ていなかったのだ。彼女にとっては「人間」も他の獲物も大した差はない。人間が非人間の化け物をミュータントと一括りにして呼ぶように、彼女も人間を自分以外のその他として分類している。その中で、ただ単に「アリサ」という一個人が例外として認識されていただけなのだ。

そう気がついた時、ベラを責めることはできなかった。彼女には悪意の欠片もなかったのだから。

もしかしたら、理不尽に怒ることはできたかもしれない。全部お前のせいだと。甘美な誘惑だった。

けれどもそれは自分自身の責任から目を逸らし、逃げ出すことだとアリサは理解していた。一時は楽になるかもしれないが、その後は永遠と自分の弱さに苛まれることになる。逃げ出すものと、耐えるもの。罪悪感に耐えることができるほど、アリサの精神は強くなかった。

自分に何かできなかったのか。できたはずではないか。

むしろ、そう思ってしまう。事実、認識の違いに気が付けなかったのはアリサの罪だ。けれでも、そんな考えは明らかに傲慢に過ぎている。だからこそ襲いかかった無力感であり喪失感であり、どうしようもない後悔が湧き上がるのもまた避けられようがなかった。

「コレ、そいツがモってタ」

ベラはアリサの目に入るように、足元に持っていたナップザックを置いた。

血糊の張り付いたそれはアリサに自分の過ちを自覚させるには十分で。裂かれて破れた部分から幾らかの缶詰がゴロゴロ転がり落ちるのを、アリサは疲れた目で追っていた。

わざわざ容器まで見せて、見つけたら持ってきてくれと頼んだのも自分だ。今となってはこれもまた、己の苦しみを増すだけ。

「タベないノ？これナラ、タベられルとオモっタ」

「今は……いいです。それより、その人を殺したところまで連れて行ってくれませんか」

アリサは吐き出すように言った。

食欲など湧くはずもなかった。たとえ口にしたところで胃が受け付けず、戻してしまうだろう。

一つの考えが頭に浮かんでいた。それはこの期に及んで、あるいは今だからこそ光を

放っている。この暗闇の中で輝く、唯一の希望。誘き寄せられる羽虫のように、アリサは盲目的になりたかった。

??

穴の先は以前と変わらず、濃密な闇が広がっていた。

アリサはベラの持ってきたナップザックを背負い（破れた部分はどうしようもなく、端を縛るなり、荷物に入っていたテープで止めるなり何なりして応急的に修理することしかできなかった）、必死でベラの後を追う。彼女はこの暗闇が全く問題ないようで、すいすい前に進んでいってしまう。

今度は束ねたキノコなんていう、何も無いよりかはマシなものではなく、ちゃんとしたライトをアリサは持っていた。それは袋の中身の一つだが、人間がこの暗闇の中を光無しで歩けるとは思えないので予備だったのだろう。電池も幾つか見つけ、暫くは光に困ることもない。

しかし、それでも足元が覚束ないのは目の前が全く照らすことができないからだった。キノコが発する光とは比べ物にならないくらい明るい光が出ているはずなのに、ある地点で突然光が届かなくなる。

この空間特有なのかもしれないが、それはあまりにもあからさまで、どうにも何かの意志があるように感じた。闇は生き物でも何でもないのに。

ベラが案内した場所はそれほど離れていなかった。十分ほど歩いた場所に死体が転がっていて、辺りは撒き散らされた血で真っ赤な血溜まりができている。

倒れていたものは、肉達磨としか形容ができなかった。恐らくは男で、全身がバラバラにされていた。齧られたような跡もある。

抵抗したのだろう、側には壊れたライトや小型の自動拳銃、それに空薬莢が何個か落ちていて、揉み合ったような形跡があった。頭は最終的に飛ばされたらしく、離れた場所に転がっていったのか目に見える位置にはない。

死人の顔を見なくてよかったことに、アリサは心から感謝した。

拳銃を拾い、状態を見てみる。弾は撃ち尽くされていたが、壊れてはいなかった。荷物の中には弾薬も多少あったので、武器として使うことはできる。

ベラを横目に見た。あれだけ暴れたのだ、もしかしたら彼の撃った弾丸も何発かがベラに当たっていたのかもしてないが、彼女は痛がる素振りさえ見せていない。彼の血を飲んだことで既に回復しただけなのかもしれないが、彼女にとってこんなものは脅威にすらならないということか。

「ベラ、この人はただ歩いていましたか?それとも、何かを撒いたり、持っていたりしま

せんでした?」

「……たしカ、ナガいヒモをモっていタ。ハズ」

ベラは少しばかり考え込む素振りをしたが、すぐ思い出したらしくそう答えた。

一緒に周囲を探すと、千切れたロープが見つかった。その先は暗闇の先へと続いているものの、何処かに縛り付けられているのか引っ張ると手応えを感じた。

(間違いない……この人は「外」から来た)

確信が頭に浮かんだ。

ベラが狩ってくるミュータントの出所は外から入ってきた奴らなのではないか、という考えは前々からあったが、こうして人間がやって来たならば間違いあるまい。この空間に出口は複数ある。

そして、この暗闇だ。人間がわざわざ入ろうとするからには、アリサのような迷子でもない限り、帰り道を見失わない為に何かしら跡を残すだろうと思っていたのだが。命綱のロープとなれば、これは非常に都合が良かった。このロープを辿っていけば、この空間から出られるかもしれない。

「……」

アリサはロープを辿ってその先へと行くことにした。わざとベラには声をかけなかったが、彼女はアリサが移動し始めたのに気がついてその後ろに着いてきた。

ちらと振り返ったが、それをどうとするでもなく、ただひたすらに先を目指し続けた。どうせ自分にはどうしようもないこと。

ある意味で、諦めることもまた甘美であった。抗うことをやめ、任せるまま流されていくだけ。流れに逆らうよりも余程気も楽だ。

真面目に向き合うというより、アリサは物事を投げ槍に、ただただ受け入れていた。

――あの小娘は呪われている！村を滅ぼす！

アリサはふと、魔女の言っていたことを思い出した。

辛い旅の中で、すっかりそんなことは頭の中から離れていた。正直な話、真実かどうかなんてどうでも良かったのだ。一人ぼっちになった自分にはどうでもいいことだし、そもそも呪い云々関係なしに旅路で死ぬかもしれないとも思っていた。

もしかして、そのせいなのではないだろうか。本当に自分は呪われていて、そのせいであの人は死んだのだろうか。

たとえ殺した張本人がベラであったとしても、魔女の言った周囲を滅ぼすという呪いの話が蘇れば、粘着質にアリサの脳裏にこびり付き、そうそう簡単には取れそうになかった。

こつこつ、こつこつ。かちゃかちゃ、かちゃかちゃ。どくどく、どくどく。

一人と一匹の足音と、己の心臓の音だけが暗い空間に響いている。深い、深い闇の中。

自分の思考も深みへと嵌っていく。

そうだ。よくよく考えてみれば、自分はきっとベラを引き止めたい一心だったのだ。

血を与えたのも、名前をつけたのもそう。一人になりたくなかった。ただそれだけ。彼女が自分の元から離れていかないようにしたかっただけなのだ。

（何て独善的で、浅ましい……）

そんな気付きも今更でしかない。

自分の中に彼女に対する同情があるのではないか、と思っていた。きっとそれも間違っていないだろう。だが、それだって結局は自分自身の為。一方的に傷の舐め合いを求めていた。そんな自分が醜く思えて、仕方がなくて――。

――唐突に、目の前の暗闇がなくなった。滑らかなコンクリート壁と扉が、すぐ先に現れた。

いや、突然現れるということはないのだから元々そこにあったのだろう。けれども光が照らすまでは気がつくことができず、暗闇の中にいきなり出現したように思えたのだ。

鉄製の小さな扉で、バルブの開閉機が付いている。「基盤」で一般的な気密ドアだ。ロープはバルブの取手に縛り付けられていた。

扉は固定されていなかった。その大きさにも関わらず、厚さがあるのか非常に重たい扉に全体重をかけて押した。だが、小柄なアリサでは力が足りないのか開かない。大の男なら問題はないのかもしれないが。

何とか開こうと四苦八苦していると、いつの間にか横にいたベラが手を貸してくれていた。一気に軽くなったように感じる。

錆び付いた金具が音を立て、扉がゆっくりと開いた。

8、選択　前編

扉を開けた先――あの空間の外はちょっとした部屋になっていた。

荒れ果てた場所だ。かつては物置か倉庫として使われていたのかもしれない。棚や木箱があちこちに置かれていたが、その殆どが壊れている。

地面には雑多なゴミが撒き散らされていて、部屋の端には蜘蛛の巣が張っている。どうやら長年放置されてきたようだが、焚き火の跡があったり、その周りは掃除されていたりと最近になって誰かやってきた形跡があった。

十中八九はあの男だろう。一人分の形跡しか見当たらないことに、アリサは取り敢えず安堵した。

彼の荷物はざっとしか確認できていなかったが、せいぜい一人分の旅支度としか言えない量だった。だがそれだけでは何とも判断できないし、不安だったものの、結局のところ彼に同行者はいないようだ。

あらかた、彼は単独の旅人か探索者の類だったのだろう。「基盤」の未探索地域を捜索し、価値あるものや新たな発見を目指す人々は結構いると聞く。

彼は偶然あの空間を見つけて、好奇心故に入ったのか。それとも……何か目的があっ

たのか。本人が死んでしまった今では想像することしかできないが、大体はそんなところだろう。

ただ、どうしてこんな場所に繋がっていたのか。それは完全に謎だ。アリサには分からないが、取り敢えず部屋の外に出てみることにした。ベラはあの小さい扉を潜るのに若干手間取ったようだったが、抜け出してきたようでアリサの後ろに着いてくる。

先程のような気密扉ではない、普通の扉を開けて部屋の外へ抜けると、所狭しと計器や操作盤が並ぶ階段状の大部屋になっていた。正面にはガラスが嵌め込まれているが殆ど割れてしまっていて、その向こうには巨大な空間が広がっている。

どうどうと大質量の水が流れる音が聞こえていた。地下特有の籠もった重低音。水路というには大袈裟過ぎた。アリサが今まで閉じ込められていた場所も上から水が流れ込んできて煩かったが、それとは比べ物にならないほど。湿気を含んだ冷たい風が窓の割れた穴から吹き込んでいて、肌寒い。

ライトで向こうの空間を照らしてみる。幾本も並んだ巨大なパイプから水が滝のように流れてきて、下の水路に降り注いでいるのが見えた。

旧文明の浄水施設か何かだろうか。現人類によっては最早管理されていないようだが、「基盤」のインフラ施設の一部だ。そうなると、ここは施設の管理施設といったところだろう。

アリサは適当に机の上を見ながら降りていったが、特に目ぼしいものは見つからない。ずっと前に使えそうなものは持っていかれてしまったのか、機械の一部は分解され、中身がバラバラに散らばっていた。

部屋を抜け、廊下を真っ直ぐに進む。突き当たりの扉を開けると先は張り出しになっていて、外の大空間に繋がっていた。

壁に取り付けられた長い階段が下まで伸びているが、かなりの高さがある。しかも周りの手すりは既に壊れたか取り払われたかしたようでなく、杭が刺さっていたような穴があるだけだ。

どうやらこの階段自体が後付けらしく、無理やり作ったような印象を受ける。所々の段が抜けていたり、状態が良いとは決して言えなさそうだ。

アリサは階段を降りようとして、ゆっくりと足を踏み出した。壁に手を沿わせて。こんな高さは今まで経験したことがなく、否が応でも腰が震えた。

「ッ――」

細心の注意を払っていた。が、体重をかけた瞬間、足をつけた板が割れた。がくん、と身体のバランスが崩れる。それぐらいなら大して問題はなかった。けれども身体に思った通りの力が入らず、重心を取り戻すことができない。その場で何度かふらつき、落ちる、と思った時ぴたりと止まった。

「……あぶ、なイ」

ベラがアリサの腕を掴んでいた。彼女の腕の力は中々強く、少し痛い。いつもはもう少し優しく扱ってくれていたような気がしたが。

少し気になりはした。が、助けてもらった手前文句を言うことはできない。一度安全な場所まで戻ると、アリサは腕を離してもらって礼を言った。

「……」

ベラは言葉では答えず、ふるふると首を振る。どうしてか、そこにまた少しだけ違和感を覚えた。若干の不気味さを感じる。が、大した印象も受けなかったことから、一旦は意識の外に追いやることにした。

彼女に掴まれていた部分には、べっとりと血が張り付いていて、ぬるりとした生暖かい嫌な感覚がした。ベラの浴びた返り血はまだ乾いておらず、未だ血塗れのまま。そんな状態で腕を掴めば、血糊が付くのも当然のことだ。

動揺していたこともあってあまり気にしていられなかったが、これは早めに何とかした方がいい。下に降りたら、脇の水路で身体を洗ってもらおう。

血の汚れを一度指摘し、そう伝えるとベラは特に何か言うこともなく頷く。だが何を思ったのか次にした行動は突飛だった。彼女は突然走り始め、助走をつけると——張り出しから飛び降りた。

「ちょっと!?」

これは予想していなかった。アリサは驚き、色々なわだかまりが煮詰まっていた頭も一瞬空っぽになる。だが、直後に大きな水柱と音が聞こえた。ライトで照らすとどうやら彼女は下の水路に上手いこと飛び込んだらしく、ばしゃばしゃ水面が派手に揺れている。

思わず溜息が出る。そして気がついた。心配した。安堵した。この状況において尚、ベラの身を案じたのだ。

度し難い。己ながら、全くもって度し難かった。

彼女はひとしきり水浴びを済ませるとすぐ水から上がり、今度は壁を垂直に登ってこちらに戻ってきた。その動きは何処か虫のようで、見ていて気持ちの良いものではない。

壁を登れるのも知らなかった。ただ、この得体の知れない生き物の生態に驚くのは最早今更だ。

戻ってきたベラはずぶ濡れだ。アリサが言った通り全身の血は殆ど流してきたようだが、長い髪は顔にべっとり張り付き、全身から水が滴っている。コートも水を吸ってだいぶ重そうだ。

「ベラ、一体何やってるんですか」

「……オリるテマ、はブけタ」
彼女はそう言うが、省けたとは一体どういうことか。勿論他に階段なりなんなりが見つかればもっと安全かもしれないが、どっちにしろ降りることには変わりあるまい。そのことをアリサは困惑しながら話すが、ベラはアリサに尋ねる。
「ナンで、オリる?」
「何故って、それは――」
続きを言おうとして、しかし思い浮かず言葉に詰まる。
何故降りるか。考えてみれば理由は大してなかった。閉じ込められた場所から抜け出した以上、元々の目的である居住地を探すということなるが。そういった今後の話をアリサは全く考えていなかった。
とにかく先に進みたいという気持ちばかりが早ったが、正直なところそう急ぐこともないのだ。
「からダ、ヤスめテ」
じっとアリサのことを見つめ、目を離さない。
ベラにしては珍しく、自分の意思を主張する言葉だった。
なるほど、さっきの違和感の理由が分かった。ずっとベラはその気持ちを溜め込んで、伝えようとしていたわけで。

（本当、馬鹿馬鹿しい）

彼女の本質はまるで変わっていない。こうして顔を真っ直ぐ見ると分かる。それこそ初めて会った時から、殆ど何も。

抑揚のない口下手で、淡白で、無感情らしい。勿論その中には価値観の違いから来る本当の無関心というものもあるのだろう。だが実際の話、自己表現が苦手だからというのも大きな理由であることをアリサはもう知っている。

本当に、変わっていない。いや、むしろ変わったのは自分なのだ。アリサは一人、心の中で本音を溢した。

アリサは考える。

確かに、疲労感と空腹感は既に耐えがたい。今だけでなく、ここ最近はずっとだ。だから元々体力が殆どない状態だったのに、それから身体を無理やり動かして歩いてきた。

惨事の衝撃故か麻痺していたが。階段で転びかけたことを考えると、まともに降り切れるか自信はなかった。先程はベラが助けてくれたが、次も都合良く助かるとは限らない。折角閉じ込められた状況から脱することができたのに、落下死するのは嫌だった。

「……分かりました。そうしましょうか」

アリサはベラに同意すると、休憩が取れそうな場所を求めて一度施設の中に引き返し

た。あの大部屋なら安全だし、適度な広さもある。
彼女は乾かした方がいいだろう。風邪を引くかどうか知らないが、ずぶ濡れのままというのはそれはそれで問題だ。
探すまでもない。燃やせそうな廃材はそこら中に散らばっている。適当な量を見繕ってくると、早速、携行マッチを擦って火を起こした。
ベラはやはり火を見ること自体が初経験だったらしく、明確に怯えるような様子を見せてその場から距離を取るように離れた。野生の動物さながらと言ったところだ。
暫くするとアリサの背に隠れるようにして戻ってきたが、あまり近付きたがらない。だがそれでは身体も乾かないし、無理やりに彼女を火の前に引き摺り出した。
彼女の着ていた厚手のトレンチコートも脱がせ、水を絞ってちゃんと乾く位置に置いておく。
異形は下着を付けていなかった。着ていた服はどうやらあのコートだけだったようで、それ一枚脱がせれば全裸になる。
火に照らされる異形の身体は、正直な話かなり綺麗だという印象を受けた。水浴びはたまにあの水路でしていたようだから、身体が酷く汚れているわけでもない。
勿論その下半身は人間のものではない。一般的な人間の美的感覚、つまりアリサの感覚からすればそれは異形のものであり、醜いとは言わないまでも不気味なそれだ。しか

し上半身は紛れもなく人間のものであり、真っ白で傷一つない肌が暖色の光に当たって光っていた。

怪我ぐらいなら何度だってする。かすり傷やシミ一つないとなると、それはやはり彼女の回復能力故。世の中の女は皆羨むことだろう。

アリサは視線を外した。ベラ本人は大して気にする素振りは見せなかったが、そういった趣味は持ち合わせていない。まじまじと見つめるのも変だ。

くぅ、と腹が鳴った。空腹を我慢するのもそろそろ限界だ。気分も落ち着いてきたから、食欲も戻ってきていた。

アリサは担いできた男のナップザックの中身を漁る。缶詰が何個か、携行食糧の袋も少し。替えの下着、水筒、燃料、小型ランプ、携帯ナイフ、弾薬、煙草、その他諸々。中身をひっくり返してみても、身分証明書になりそうなものはなかった。家族写真くらいならあっても良さそうだが、そういうものでさえなかった。

ベラが持ってきた時には袋は少し破けていたから、もしかしたら何処かに落ちたのかもしれない。あるいは男が身につけていたか。アリサは彼の死体を漁ることは流石にできなかったが、あったとしても血塗れで読めなかっただろう。というか、元々持っていなかった可能性だってある。

結局、彼が何者かは分からず仕舞いだ。名前すら分からず、どうしようもない。

食糧の入っている袋を開ける。脱穀して乾燥させたエンバク（オートミールのこと）を固めた棒状のバーが結構入っていた。他にも、ごろっとしたチーズの塊や燻製肉が少々。

柔らかいパンはなかった。地下世界では――特に、アリサが住んでいたような小規模居住地の大部分では――ライ麦から作られるふかふかの黒パンは高価な食べ物だ。アリサの村では祭日の日など特別な日には食卓に出されるが、それ以外の時は滅多に食べることがなかった。

安価な食事となると、カーシャ（粥）やシチー（野菜スープ）が一番になる。蕎麦の実のカーシャは特に一般的で、腹も膨れる。ただ、旅人にとっては調理に少しばかり手間がかかった。水も常に豊富にあるわけではない。

そういった場合に、乾燥させたエンバクのバーのような品は安価で保存が効き、軽くて持ち運びも便利と良い保存食だった。このまま食べることもできるし、水で戻せば料理にも使える。

他にも、保存食で言えば何度も繰り返し高温で焼いたハードブレッドのようなものもある。ただこれはエンバクと比べると高価になるし、準備に相当時間がかかることや、石のような硬さからあまり好まれなかった。

アリサはチーズを薄く切ってバーに乗せ、火で少しだけ炙る。やがて熱でチーズが溶

け始め、鼻にその芳醇な香りが届いた。

一口齧る。エンバクのナッツのような香ばしい風味とチーズの濃厚な舌触りが広がった。

（美味しい……）

久々の文明的な食事。何年前に作られたかも分からない、得体の知れない缶詰とは比べ物にならない。というか、アレに感動していた自分が馬鹿みたいだった。

勿論これだって大した食事ではないのは確かだが。火に向き合い、ゆっくりとまともな食事に集中できるのは一ヶ月以上ぶりと言ってよかった。あの魔女が来てからは、そんな機会は殆ど無くなってしまったのだから。アリサは喉に詰まらせながらも、胃にものを入れていった。

ベラも匂いに反応したのか、鼻をひくひくさせている。少し分けて食べさせたが、どうやらあまり気にいらなかったらしい。一口食べると、それ以上は欲しがらなかった。

試しに燻製肉を与えてみると、こちらは気に入ったようだ。彼女に一枚与え、アリサは食事を終えて横になる。

久々の食事ということもあって胃袋が相当小さくなったのだろうか。元々小食なのもあったが、バーを二本も食べれば腹は一杯になってしまった。

これからどうすればいいのだろう。

腰を落ち着けてみれば、そんな迷いが頭を支配し始めた。
自分のこともそうだが、ベラに関してもそうだ。彼女を連れて行くべきか、それとも置いていくのか。それとも別の選択か。
思い付かない。思い付かなかった。
詰め込んだ中の廃材にまで火が回ったようだ。更に赤々とした炎の勢いはどんどん強くなっていく。その炎の中に、アリサは答えを求めるように見つめる。
正直な話、あの場を抜け出した、という実感はまるで湧いてこなかった。
ただ鈍感なだけで、少し時間を置けば実感も湧いてくるのかもしれない。だが、あそこを抜け出したからといって問題が解決したわけではなかった。未だ安住できる場所が見つかったわけでもなく、土地勘もないような場所を彷徨い続けなければならない。目的の達成にはまだまだ遠いわけだ。
ベラの扱いはもっと厄介で、これから先の物事を色々と難しくさせる。
この外見からして完全に人外の存在は、その中身も完全に人外であることを証明してしまった。少なくとも今のアリサにはそうであるということが理解できる。
例えば彼女を連れて行ったとしても、アリサの目的とする居住地を見つけた時、ベラは受け入れ難い存在なのは間違いなかった。
彼女を解き放ったのは自分自身で、責任はアリサにある。けれども、あの闇の空間に

置いていくのがアリサとベラ両方にとって一番良いことに思えた。
それは果たしてただの厄介払いか、エゴに過ぎないのか。所詮、どう感じようが自己弁護であるのは薄々理解していた。
（眠い……）
アリサは疲れていた。眠気にぼやけた頭に色々なことが浮かぶ。
考えることは多い。しかもその殆どが今すぐ結論が出るとも思えないものばかり。
なんとかできないものだろうか、と思っているうちにアリサは眠りについてしまっていた。
夢は見なかった。

9、選択　後編

目が覚めた。唐突に、ばちりと脳の電源が入ったのだった。

周りを見渡すと、かなり暗くなっている。

焚き火は既に消えてしまったようで、ほんの少しの煙が若干燻っている。窓の外から入ってくる、何処かの光が水面に反射した青白い燐光が、手元が何とか見える程度に照らしているだけ。

起きてすぐ、思い至ってベラの姿を探そうとした。いつぞやの時のように、何処かへ行ってしまったのではないかと思ったからだ。彼女のことだから安否に何らの心配はしていなかったが、まだあまり把握ができていない場所で勝手に行動されるのは不味い。だから、少しばかりアリサは焦った。

だが、彼女はすぐ隣にいた。自分と同じようにいつの間にか眠っていたようで、側の機械に背を預けて座り込んでいる。尻尾だけはアリサの背にぴったり付けられていたから、ベラのことを起こさないようにゆっくりと身体を起こした。

これほどぐっすり睡眠を取れたのはいつぶりだろう。だというのに、アリサの気分は酷いままだった。頭が重く、こめかみを押されているような鈍い圧迫感がある。

眠るベラのことを見つめる。

ふらっと現れてまたすぐ消えてしまうベラのことだ。彼女が眠っているところは今まで見たことがなかった。どうにも今までそんな姿を想像できなかったが、今はそれが目の前にある。

警戒なんて抜け切った寝顔。固まった身体。彼女の綺麗さと、服を脱いでいることもあって、人形然とした非人間的で童話的な美しさがある。

ベラはアリサのことを信頼している。それは間違いのない事実で、アリサ自身も明確に理解していた。それが自分が彼女に対して抱えるものと同じであるかは別として、ベラの中でアリサという存在は紛れもなく特別だった。

だから彼女はアリサを殺さないし、そんなことを思いもしない。

同様に、アリサがベラに危害を加える筈がないと信じ込んでいる。

だからこんな、安心した寝顔を自分に晒すことができるのだ。

（今なら、もしかして……）

思い付いたそれは悪魔か、それとも天使の囁きか。

アリサは殆ど無意識に手をポケットに入れていた。硬くて冷たい何かに指が当たる。

それは拾ってきた拳銃だった。いつの間にかアリサの中身は殺意で埋め尽くされていて、煮えたぎる鍋のようにぐらぐらと蓋が揺れていた。

何処からともなく現れたそれは違和感がまるでなく、まるで今まで忘れていただけのものを思い出しただけとさえ感じた。

何かの因縁にしがみつくように拳銃を握り、取り出した。手汗が湧き出してきて、じっとりと細身のグリップを濡らす。酷く重たい。鈍く黒が光っている。

撃つべきか。彼女を殺すべきか。

殺意が頭を支配する中、引き金を滑らかに引くだけの感情的な勢いがあった。けれども、理性がギリギリのところで思考の猶予を与える。

今なら彼女の頭を一方的に撃つことができる。

ベラは眠っていて、完全に無警戒だ。まさか信頼しているアリサに突然寝込みを襲われるとは思うまい。

身体は再生できたとしても、生物の核である頭部や背中は一体どうなのか。装填されている九ミリマカロフ弾を九発全部叩き込めば、もしかしたら殺すことができるかもしれない。

ここでベラを殺すこと、それは人類社会にとってはきっとプラスに違いなかった。

彼女はあまりにも危険すぎた。知性のあるミュータント、それだけで十分に一級の化け物であるのに、彼女の戦闘能力はそこらのミュータントを軽く凌駕する脅威だ。

結局のところ、彼女は人間でない。人間を殺し、その血肉を貪る異形であるのが現実

なのだ。

それを自分が止めることができるのか。他ならぬ自分自身が。そして、唯一彼女の特別の自分にすらできないことならば、一体誰ができると言うのだろう。

何故ならもう既に、誰か死んでいる。一線は越えてしまっていた。見知らぬ人間であったが、アリサに自身の無力さを教え込むには十分過ぎる犠牲。人の生き死にがこの残酷な世界でどれだけ軽いものだったとしても、アリサ本人にとってはあまりにも重大過ぎた。

看過することは無視であり、許容であり、見殺しにすることだ。少なくともアリサの正義感はそう訴えている。

果たしてこれは義務感か、願望か、それともただの気の迷いなのか。

ベラの額に銃口を突きつける。

脳裏に彼女との記憶が思い浮かんだ。

乳を吸う赤ん坊のように、滴るアリサの血を必死に舐めとる姿。まだ身体も癒えないのに、脚を引きずりながら獲物をアリサの元に届ける姿。

血に塗れ、人を殺したにも関わらず無感動な姿。そして階段から落ちかけたアリサを救い、気遣う姿。

どれかが本物で、どれかが偽物なわけじゃない。全部が真実。全てが彼女という存在

の一面。この異形は不気味で、無愛想で、そして。
アリサは目蓋を閉じた。
指に込める力が大きくなる。

??

気がついた時、アリサは窓の側に腰掛けて外を見つめていた。
どうどうと大きな音を立てて流れ落ちる滝。動きがあるのに、何の代わり映えもない。その様はアリサに永遠を感じさせ、切り取られた一瞬がいつまでも繰り返されているだけのように思えた。
もしかしたら、この景色はこのまま変わらないのかもしれない。ここが造られた大昔から、「基盤」が崩れるいつかの未来まで。
この瞬間がずっと続けばいいのに、そう思った。何も考えず、水が流れ落ちる様を見つめているだけ。何の心配もない。でも、何の幸せもない。
人間は、生き物は、違う。たとえその一瞬がこの世界全体で見ればどれほど一抹のものに過ぎないにしても、一秒一秒を生きていかなければならない。腹が減るから。喉が乾くから。寂しくなるから。きっと、それこそがこの世に生を受けてしまった呪いなの

だ。

何故か分からないが、アリサは何処か物悲しくなった。憂愁を覚えた。そして、まだ見ぬ未知の未来を恐れた。

ここに留まることは全てが許さない。いずれは出発しなければならない。アリサ自身の命のためにも。でもそれが何だか嫌で、この瞬間が出来るだけ長続きすればいいのに、そう願ったのだった。

物音がして、後ろを見る。

ベラの眼が開いていた。彼女の緋色の瞳が自分のことを不思議そうに見つめていた。

アリサは幾ばくかたじろぎ、苦笑いを浮かべる。人間の少女は己を嗤っていた。そして気まずさに耐え兼ねたのか、ふっと顔を逸らしてまた外を見やる。だが、異形はアリサのすぐ側にやってきた。まだ眠たいのだろうか、何本かの脚をずりずり引きずりながら。

「どウか、しタ?」

「どうもしませんよ。ベラ、突然どうしてそんなことを聞くんです?」

あえて平常を貫こうとするアリサに対して、しかしベラはこう告げる。

「どウか、しテル。アリサ、クルしソう」

アリサは目を細めた。

この異形はとても優しい。そうだ、こんな卑怯な人間の自分なんかよりもよっぽど。

「……悪い夢を、見たんです。それだけ」

口にはそう出した。けれども、それは本心からの言葉とは到底言えない。

アリサはあれが夢だったなんて思っていない。あれはきっと現実だった。その証拠に、離れた場所に拳銃が落ちている。

あの後どうしたのか、記憶はない。が、それはつまりそういうことなのだろう。

――アリサは覚悟を決められなかった。

（いいや、それは違う）

そう一瞬思って、だが否とすぐに否定した。そちらの道に進まず、別の道に進んだ。それだけだ。

村を追放された時とは違う。あの時は、そう、こうであるという結果だけが転がっていた。アリサにはどうしようもないことで、死ぬか死を先延ばしにするかしか道は無かった。無力な自分には、選択肢なんてなかったのだ。

けれども今は自分の意志の結果、アリサはここに立っている。それは間違いなく、己の選択だった。

きっとこの世には色々な未来がある。数多の選択の末に枝分かれた結末が。けれども、その全てを手に入れることは叶わない。アリサのちっぽけな掌に握りしめることが

できるのは、無限の中のたった一つだけ。
それがどれだけ疎ましく、暴力的で、そして情け深いことか。
「ベラは、これからどうしたいです？」
アリサはそう問うた。どうするべきかなんて分かっていたことだが、それでもベラの意思を確認する必要性はまずあったから。
「……わかラ、なイ」
分からない。それも当然なのかもしれない。
彼女に記憶はないらしいのだから、それはいわば生まれたばかりの赤子も当然ということ。本能から獲物を狩り、生きることができても、それはその日暮らしに過ぎない。
人間的な、未来を願う気持ちというものは彼女に欠けていた。
「なら、私と一緒に行きましょう。ここと違う、何処か遠くへ。だって私達は二人ぼっちなんですから」
ベラは一瞬呆けたような仕草を見せた。すぐ元に戻ってしまったが、彼女のその顔をアリサが忘れることは一生あるまい。
「わカっタ。そウすル」
「ありがとうございます」
何食わぬ顔で礼を伝えながらも、アリサは自分の心臓を細い針が刺すような痛みに襲

われた。
ベラの好意を弄び、嘘をついて利用するという罪悪感に。
彼女を殺すべき云々の他に、冷静な理性はある側面をもアリサに提示していた。
それは、あの閉塞された空間から脱出した現在においても、自分が未だ何処かの居住地を目指して旅を続けなければならないということ。そして、幾ら食料などが確保できたとはいえ、前のようにミュータントに襲われたら一たまりもないということだ。
武器はある。だが、こんな小さな拳銃であんな化け物相手に何ができるのか。頑強な皮膚を持つミュータント相手に拳銃弾が通用しないかもしれない。あるいは、それが小型の部類であったとしても、捌き切れないほどの集団だったら。以前のように相手が一匹のみとは限らないのだ。
それは汚い打算だった。理性が導き出した、外道の考えだった。
――まさにそうだ。外道でいい。自分は外道でいいのだ。
苦い唾を飲み込む。
けれども、心の何処かで安堵と喜びの声を上げる自分がいることにも、アリサは気がついていた。
彼女とは一緒に居過ぎた。それがたとえどれだけ短い間だったとしても、あまりにも間が悪過ぎた。肥大すぎる情が移ってしまうには、十分なほどに。

（ベラがいれば、自分の身の安全は保証される。それは間違いない）

だから、そう信じる。信じ込む。

たとえ自分の心の何処かに情があったとしても、あるいはその全てが既に侵されていたとしても。自分のような人間がそれを理由に、言い訳にしていいはずがないとアリサは疑わなかった故に、その存在を認めようとしなかった。

??

出発の準備などするほどのことはなかった。

元々荷物は少なく、アリサもだいぶ体力が回復したこともあってすぐにでも移動を開始できる。

けれども、アリサはあえて先を急ごうとしなかった。

まず、自分のせいで殺されてしまった男の供養をするべきだと考えたからだ。あんな暗闇の空間で一人、誰にも知られず朽ちるだなんてあまりに可哀想過ぎる。一歩間違えれば自分がそうなっていてもおかしくなかったのだ。

同情なのだろうか、それとも罪悪感なのだろうか。あるいは偽善なのか。己に嘘を吐き、騙し続けることを決めたアリサにはどれが本当なのか分からなかった。だが、とに

かくそれを済ませないことには先に進むことはできないと思ったのだ。
しかしながら、その目論みはすぐに潰えてしまった。というのも、あの扉は――最早あの暗闇の空間には繋がっていなかったからだ。
気密扉を開けた先は小さな機械室があるだけで、外に繋がっているような様子は何もない。行き止まりの、完全な密室。
まるで元々そんなものはなかったのだと言わんばかりに、跡形もなく消えてしまった。
アリサにその理由は分からない。だが何か不思議なことが起こったのだということは理解した。
どうしようか悩んだものの、行けないならばどうしようもない。結局、気密扉の前に、瓦礫と廃材で小さな塔を作ってその場を離れた。
ベラはその様子をじっと見ていたが、手出しはするなと言っていたこともあって何もしなかった。彼女の価値観からすれば、意味不明な行動に見えていたかもしれない。
そうしてからアリサ達はやっと階段を降り、その下の空間の探索を始めた。これだけ巨大な施設なのだ、大型の整備道路やトンネルくらいには繋がっているだろう、と考えたからだ。
人類の居住地が旧文明によって残された「基盤」の設備に依存している以上、闇雲に

探すよりもそういった街道を通って行った方が手掛かりを見つけやすい。
実際、ここから流れる水路の脇にはかなり大きな通路があった。これを下っていけば何かしら、小さな村くらいは見つかるかもしれない。
ただ、発見はそれだけに止まらなかった。通路に繋がる開かれたゲート、その横にはもう一つ巨大な開け放たれた別のゲートがあった。
その先は坂になっていて、緩やかに上へと向かっている。
壁には大きく白い文字が書かれていた。古い、とても古い言葉だ。恐らくは旧文明の言語。研究者ならば話は別かもしれないが、ただの村娘に過ぎないアリサでは理解できない。
しかし、その下には小さく別の言葉が書かれていた。丸に毛が生えたような、奇妙なマークも一緒にある。それだって相当古いもので所々掠れていたが、これは今の文明の言語だった。以前ここを訪れた古い人間のものだろうか、アリサは読むことができた。
――このサキ、チジョウ。
チジョウ。地上。アリサは予想もしていなかった言葉に、崖から突き落とされたような浮遊感を感じた。それは紛れもなく幻覚にしか過ぎなかったが、それもまた確かに現実のものだった。
地上と言えば、それはもう一つしかない。かつて人類が文明を築いた場所。かつての

故郷。かつての――今ではもう届かない、人類が放逐された楽園。

空があるという。海があるという。地平線、水平線。言葉でしか知らないそれらがアリサを魅了する。限りなく広い、自由な場所。一瞬、御伽噺に聞いたそんな幻想に想いを馳せた。

でも、アリサにとってはそれは既に朽ちた夢物語でしかない。きっとアリサだけではないだろう。地下に住む現人類の殆どがそうだ。過去は過去でしかない。地上は既に、人類が暮らすべき安寧の地ではないのだ。

踵を返し、水路に沿った通路を選んで進んでいく。

まさか自分が地上のすぐ側の上層まで登ってきているとは思っていなかったが、これは明らかにおかしかった。アリサは突き落とされて水路を流されてきたこともあり、人類の住む中層よりも更に下の階層に流れ着いていたはずだった。

間違っても、上に行くことは絶対にあるまい。

やはり、原因はあの暗闇の空間なのだろうか。あの空間には離れた場所を繋ぎ止める不思議な力があったのかもしれない。

アノマリー。そんな言葉が思い浮かんだ。地下世界で信じられる、摩訶不思議な現象。怪談のように伝えられるそれは、しかし紛れもない人類の脅威の一つ。あれは、まさかそれそのものだったのではないか。

そんな場所で出会ったベラは――。

??

きっとアリサは、この日に下した決断を一生後悔する。死ぬその時まで、己の色のない罪を背負い続ける。

そして、いつかカルマに押し潰される日がやって来るのだろう。それでもアリサは、それを甘んじて享受するのだろうという確信を薄っすらと覚えていた。

アリサはベラと共に、下っていく。生命のあるべき場所から、荒廃した現文明の在処を目指して。

下へ。

下へ。

下へ――。

２、Ｈｅｚｎａｋｏｍｃｙ（異邦人）

１０、亡霊

「基盤」の壁を崩して取り出した、大小の瓦礫。それを積んで作っただけの小さな塔。薄い板に書かれた名前はどうしようもなく空虚で、もう持ち主がこの世にいないことを示唆している。

アリサを産み、育てた女性が生きていた証は今となってはそれだけだった。

幼い少女はその前で立ち尽くしていた。来る日も来る日も村の共同墓地にやって来て、管理人に言われてやっと去っていくだけの毎日。かと言って何をするでもなく、涙すら流さない。

混乱していたのだろうか。突然熱を出して意識を失い、魘されベッドに伏すだけの日々が長く続き。やっと動けるようになった頃には、両親はどちらともいなくなっていた。

まだ五歳の彼女に残酷な現実を理解できるはずがないと周りの大人達は考えたし、彼女を引き取った叔父のボリスもそうだった。

けれども、アリサ本人は違かった。アリサは自分の母親が既に死んでしまったことを

理解していたし、その結果自分がどうなったのかも間違いなく分かっていた。
ただ、どうしようもない現実を受け入れることがまだできなかったのだ。理解することと、受け入れることは全く違う。幼い彼女には、そんな大人でも難しいことをやり遂げる精神的な準備はまだ整っていなかった。
「アリサ、もう帰ろう」
帰りの遅い義娘のことを心配したのか、仕事帰りのボリスがやって来て、帰宅を促した。
彼は墓地の管理人からアリサをどうにかして欲しいと頼まれていたのだった。まだ彼女に辛い現実を押し付けるわけにもいかないとボリスはあまり物事を強要しなかったが、流石に時間も遅くなってくると連れ帰らなくてはならない。アリサは、放置すればそのまま餓死するまでそこに居座っているような感じをさせていた。
「叔父さん、人は死んだらどうなるの?」
アリサは唐突にそう口に出した。
死んだ母親は一体どうなったのか。自分が死んだらどうなるのか。
きっとそれは人類が文明を持ち始めてから現在までずっと抱え続ける命題の一つで、アリサも肉親の死という出来事を経験して自然と生まれた疑問だった。墓の前で問いかけ続け、しかし答えは未だに出ない。

アリサはその時、自分が一体何を恐れているのかさえよく理解できていなかった。自分も病の中で経験した、得体の知れない寒さ。あれを超えた先には一体何があるのだろう。不意に掴みかけて、手を離したそれ。正体の分からない深い闇。

ボリスは一瞬たじろぎ、しかしはっきりとした口調で聞いた。

「お前は魂を信じるかい？」

「……魂？」

「そうだ。人は死んだら古い肉体を捨てて、魂だけになる。そうして死後の世界に行くんだよ。そこで幸せに暮らすんだ」

死後の世界。アリサはその言葉を心の中で反芻する。

アリサの住む村では、旧文明にあったような体系付けられた宗教は信じられていない。その代わり、地下世界に広がる迷信めいた都市伝説が流布している。

曰く、「基盤」の地下深くには死後の世界に通じている。曰く、死んで供養されない魂は死後の世界に行くことができず、「基盤」の闇に捕らえられる。曰く――そんな、出所の知れない噂話。

ボリスの言った話は、曖昧ではあったがその中でも比較的楽観的で、尚且つ普遍的に信じられる死生観の一つだった。

アリサは、少なくともそう信じたいと感じた。だって、死んだら何もなくなって、た

だの肉と骨になってしまうだなんてあまりにも残酷だ。救いようがなさすぎる。
けれども、本心からそう信じられるかどうかは自信が持てなかった。
「叔父さん、私、分からないよ」
ボリスは笑って、アリサの頭を撫でる。ごつごつしたコブだらけの掌。不器用ながらも、そこには確かな優しさと温もりがある。
生きている人間。その証拠を感じとる。
「お前がそう信じて、祈ることが大事なんだよ。さぁ帰ろう。今日は美味しいパイを貰ってきたから、温かいうちに一緒に食べよう」
「……うん」
アリサはボリスに連れられて歩いていく。
最後にちらと振り返った石の塔は、やはりどこまでも空虚で空っぽに思えた。

??

代わり映えのない毎日だった。
アリサとベラは旅を続けていた。浄水施設を出てから、途中で何本かの脇道を見つけたものの、ずっと水路に沿って真っ直ぐ街道を歩いている。稀に昔人間が来たのだろう

という跡は見つけるものの、未だ村どころか生きた人間に出会うことはできていない。
一体いつまで続くのだろう。
そんな考えが頭に浮かぶのも無理はない。だが、それでも一人で歩いてきた時を思えば気分は遥かに楽だった。
なにしろ、今は同行者がいる。無口な方だが、話しかければ答えてくれるし、自分以外に温もりを感じることができるというのはアリサの精神を予想以上に健全にさせていた。
物資が比較的潤沢なのも理由の一つだろう。ランタンと違って電気式の懐中電灯は遥かに遠くまで先を照らすことができるし、電池にはまだまだ余裕がある。食料だって当分は心配しなくていい。ベラというミュータントに対抗する手段だってあった。
村を出た時は、それこそあまりにも貧相な装備しか持っていなかった。何処かで人知れず行き倒れる為に歩き続けたようなもので、そんな自殺同然の旅路に明るい希望はまるで望むことができなかった。
今は、希望がある。それまでには色々なことがあったし、精神には確実に大きな亀裂が残った。それでも今日を生き延びることができれば、明日を生きる権利を得る。これだけは間違いなく、その点で言えばアリサは自分の未来に確信を持てたし、進む先に光を求めることができていた。

目の前をずっと、真っ直ぐ歩くだけ。ただそれだけの代わり映えのない行為でも、心の持ち様で大きく性質が変わっていた。余裕を持つということの重要さを思い知る。

ここ数日、暇を持て余したアリサはこの水路が何処に続いているのか考え続けていた。

この行く先を知っている人がどれだけいるだろう。この水路だけではない、「基盤」を流れる全ての水路に言えることだ。その全てが下へと流れていくが、実際に何処が終着点なのか聞いたことがなかった。

アリサの村の近くにも水路はあったが、それもまた同じようなものだったはずだ。行き止まりになっていて、地面に空いた大穴から下に濁流が流れ込む。その先に人間が足を踏み入れる事は流石に出来ず、何処に繋がっているのかは分からない。

何処かに行き着いているはずなのだが、同時に「基盤」が冠水していない以上、地下には何かの施設があるに違いないという考えは広く信じられている。しかしその実態を見た者はおらず、かと言って気にする人間もそれほどいない為、アリサの知る限りでは完全な謎だった。

かつて聞いた話を思い出す。「基盤」の最下層は死後の世界に繋がっていると。真偽のほどはアリサに分かるはずもないが、もしもそうなら、この水路を永遠と辿り続ければ、いつか死後の世界とやらに辿り着くのだろうか。そんな、くだらない考え事をして

いた。
少し歩幅を開けて後ろをついて来るベラが大欠伸をした。思考が途切れて、現実に引き戻される。
長い距離を歩いてきたが、アリサにはまだ体力がある。それならベラも有り余ってそうだが、しかし、かなり眠たそうだ。
ここ暫く彼女と一緒に旅を続け、四六時中生活を共にして分かったことの一つが、ベラの睡眠時間がかなり長いということだった。時計が手元にないので正確な時間はわからないが、それでもアリサの睡眠より遥かに長い時間、彼女は眠りにつく。かといって、起きている時間が長いわけでもない。
一日の中で、起きている時間と寝ている時間が殆どイコールなのだった。それでもアリサが時間を見計らってベラを起こしているのだから、放置していればもっと長い時間、下手したら一日中寝ていてもおかしくなさそうだ。
それが分かってからは、彼女の眠気に合わせて旅を続けることにしていた。何かトラブルが起きた時にベラが動けないとなると大問題になるし、とにかく急がなければいけないというほど余裕がないわけでもない。
丁度、目の前に壊れた馬車が打ち捨てられていた。随分と古いもので、所々朽ちている。さほど手間は掛からず分解し、焚き火の燃料にできるだろう。

アリサはベラに声をかけた。

「今日はこれくらいにしましょう。水を汲んできてください」

こくりとベラは頷き、手渡された小さい鍋を持ってすぐそこの水路まで歩いていく。その間に、アリサは廃材を集め、火を起こす準備をしていく。

馬車の中身は何もなかった。埃がかなり積もっていることからも、長い間ここに放置されていたのだろう。一体どういう経緯でこんな何もない場所に放棄されていたのか謎だが、アリサがそれほど気をかけるようなことでもない。

捨てられた何かの機械や、崩れかけた小さな小屋。地下世界にはそういうものが多くあって、この旅の間にも幾度となく見かけてきた。

適当な場所を見繕って、野営地を確保する。テントや寝袋でもあればもっと雰囲気が出たかもしれないし、快適に違いないが。生憎とそういうものは手に入っていなかったから、火を起こして馬車から引き摺り出した椅子を二つ並べただけ。

ベラから水を受け取り、火にかけて湯を沸かす。彼女は未だ火に慣れない。最初の時ほど怯えるような仕草は見せないが、それでも自分から近づこうとは中々しない。それを少し微笑ましく見つめながら、今日の食事の準備をしていった。

今日はいつものエンバクのバーを一本と、背の低い缶詰が一つ。開けてみると魚の缶詰だった。小さなサバのオイル漬け。冷たいよりは温かい方が良いに決まっているの

で、火の近くに暫く置いてから食べることにした。
鍋には簡易スープの素を入れる。ブロック状の固形物。本当は一つそのまま使うのかも知れないが、これはあまり数がない。だからいくつかの塊に砕き、何度かに分けて使っている。味は薄くなるが、それでも無いよりは良い。身体が温まるし、知らぬ間に積み重なる精神の疲れも解してくれる。
ベラにはいつも通りの燻製肉だ。彼女はこれがかなり好きになったようで、大事そうにガジガジ食んでいる。最初こそ一気に食べていたが、一度に沢山食べられるわけではないことに気が付いたらしい。それ以来、こうしてゆっくり食べることを覚えた。一つの成長だ。
もしも道中で何がしらミュータントに出会うことがあれば、ここにもう一つ巨大な肉塊が並ぶことになる。が、最近はそういうことも滅多になくなった。だから、ここ数日はこういった食事を一日に二食。それだけというか、それほどというか。自分がついこの間までよりも、遥かに恵まれていることは間違いない。
ベラとの食事は基本的に静かなものだ。本来、食卓というものはみんなで楽しく会話をするものだし、アリサも村にいた時はそうだった。
ところが、彼女は無口だから会話は進まないし、アリサもあまり積極性を持ってコミュニケーションを取ろうとはしない。いや、最初はアリサも話をしようとしていたも

のの、結局話の種に困って気まずくなってしまう。アリサ自身、あまり自分から話す方では無いのだ。いつしか諦め、これが日常になった。

ただ、それが緊張感に溢れているわけでは無いし、ギクシャクしているわけでも無い。一人と一匹の関係としてはそれこそ自然な形で、アリサも居心地の良さを感じていた。

食事を終え、スープをちびちび飲みながら休憩を取っていた。眠気が来たら寝るだけの、何もやることがない時間。こんな時、本でもあれば嬉しいものだが。

うとうとしていると、突然通路の奥から強い風が吹いた。火の粉が舞い、思わず顔を手で覆う。目を開けるとあれだけ強かった火が消えていた。視界が真っ暗に閉ざされ、手探りでライトを探す。

なんだか肌寒い。気温が何度か下がったような気がした。ベラが唸り始める。威嚇するように、からから、くるくると喉を鳴らしている。

「どうしたんです――」

これまでにないほどの警戒心と敵意を剥き出しにするベラに戸惑いながらも声をかけた直後、視界の端が青白く淡く光る。

通路の奥――自分達が来た方角から、それはやって来た。ゆっくりとこちらに近づいてくる。アリサはその不思議な光る存在に全く心当たりがなく、一瞬唖然として目を奪われた。

段々とこちらに近づくにつれ、その詳細が分かるようになって来た。人影のような形をしているが、それにしてはあまりに大きすぎる。胴は細く、背は高い。なにより、顔があるべき場所は削ぎ落とされたかのようにつるつるだった。

ベラが遂に飛びかかりそうになる。慌てて彼女の胴にしがみ付いて抱きとめ、未だ唸り続ける口を手で塞ぐ。最初は嫌がって抵抗したベラだが、なんとか宥め抑えて大人しくさせる。

直感だろうか。あれには手を出すべきではないという不吉な予感が、言い知れない不安感があった。

アリサはそのままベラを連れ、光から隠れるように馬車の影に回り込んだ。息を潜め、強張った体を縮こまらせて。

光の人影は何かを探すような素振りを見せた。きょろきょろとあちこちを見渡し、先程までアリサ達がいた焚き火の跡を見つめている。

自分達を探しているのだ。そのことに気がつき、アリサはぞっとして思わずベラにしがみ付いた。彼女も気を利かせてくれたのか、アリサを守るように腕や尻尾を巻きつかせてくる。少し冷たいが、それでも確かな温もりを持つ肌に包まれて少しだけ安心できた。

暫くして諦めたのか、その得体の知れない何かはその場を離れた。来た時と同じよう

に、道をゆっくり進んでいく。

たっぷり五分はあったような気がした。実際はもっと短いのだろうが。完全に光が消えて、音も静まり返った後ちょっとして、アリサは大きな溜息を吐いた。

もう流石に大丈夫だろう。物陰から出て来て、アリサは焚き火の火を戻した。

その日は殆ど眠ることができなかった。あんなものを見てしまってからは頭が完全に冴えてしまっていて、また戻ってくるかもしれないという恐怖にベラの側を離れることができなかった。

ベラはというと、いつものようにすぐ寝こけてしまったのだが。これでも何かがあればアリサよりも早く反応できるのだ、無理やり起きていることもないだろう。とにかくアリサは火を絶やさないようにした。

いずれにせよ、あれが戻ってくることはなかった。一体何だったのか。その答えを知ることは永遠にあるまいが、だとしてももう一度目に入れたいとは思わなかった。

次の日（次の日と言っても、実際の時間は分からないため感覚的なものだが）になってベラを起こし、旅の続きを始めようとした時になってアリサは道端に小さな塔らしきものがあることに気がついた。これもまた相当古いものだ、書かれた文字は掠れてしまって読めないし、半分崩れてしまっている。

アリサは少しばかり考え、これを直してから出発することにした。

今になって思えば、あれは「基盤」で言うアノマリーの類なのだろう。この短期間に二つもそんな怪現象に遭遇したことをアリサは恐ろしく思った。

では、昨夜出会ったあれは幽霊だったのだろうか。確証は持てないが、それでも多分そうなのだろうな、という根拠のない想像が頭に浮かぶ。

「基盤」には沢山ああいった幽霊の話があり、死んで供養されない魂が闇に囚われ、苦しみながら姿を表すと言われている。勿論、今まで見たこともなかったが。

ずっと昔に聞いた叔父の話を思い起こす。

いつだったか、そう、母親が死んだ後だった筈だ。十年も経った今では朧げなものだが、死んだ人間がどうなるのかと、子供心ながら中々に難しい疑問をぶつけた。

（叔父さんは、困ったような顔をしていたっけ……）

そうだ、そしてアリサに魂の話をした。

随分と昔に聞いた話にも関わらず、意外にもそのことを覚えていたことにアリサは少しばかり嬉しくなった。

死後の世界。そんなものが何処かにあるならば、きっと叔父も母親もそこにいるのだろう。そう信じたい。

けれども、アリサの脳裏にふとよぎったことがあった。

死後の世界だって無限の広さがあるわけではないだろう。長い人類史の中、しかも人

類は一度は滅びかけて今に至っている。それこそ数えるのが億劫なほどの数、人間は生まれて死んでいった。

そんな大量の人間が死後の世界とやらに収まりきるのだろうか？

もしも。もしも死後の世界に限度があるならば。それが一杯になってしまった時、死んだ人間の魂はどうなるのだろうか。あるいは、もう既に一杯になってしまっていたのだとしたら。

（いや、やめよう……）

アリサはこの問いがどうしようもなく不毛であると共に、答えを出すことが極めて危険であるということを悟った。

この話はもう気にしない方がいいだろう。アリサは心の中でそう結論付け、鍵をかけて奥底にしまい込んだ。

１１、ストーカー　前編

「ありゃ……これはどうしようもなさそうですね……」

アリサは諦めたように呟く。

あれだけ終わりのないように思えた真っ直ぐな旅路は、それこそ唐突に遮られた。

彼女達の目の前には、巨大なゲートが立ち塞がっていた。アリサが村にいた時に住んでいた小屋の二倍か三倍の高さはありそうだ。

こういったゲートは何度も見かけたが、その殆どが開きっぱなしだったのに対して、これは完全に閉じられてしまっている。鼠が（この場合はミュータントの大ネズミではなく、普通の鼠のことだ）這い出る隙間もない。

明らかな障害に衝突したのはこれが初めてではない。道や天井が一部崩落していたり、ミュータントに遭遇したことは何度もあったが、今までは乗り越えることができていた。

だがこれはどうだろうか。分厚い金属製の壁は力押しに突破し難い。かといって本来のやり方で開くのは不可能だろう。古臭い電源パネルの操作方法をアリサは全くわからないし、そもそも電力が来ているのかさえ期待薄だ。

非常用の赤いランプは壊れているのかもしれないが真っ暗で、ゲート横の天井近くに並んでいる換気用のファンさえ動いていない。

途方に暮れてしまった。この先に道があるにしても、これでは行き止まりも同然だ。一旦引き返して、横道へ進むしかないだろうか。

水路はとっくの昔に壁の中に消え、一本道だけが長く続いていた。一番近い別の通路へ行くにもまた一日中歩かなければならない。

その苦労を思って溜息が出るものの、こればかりは致し方ない。

けれども、もしかしたらこの向こうは人間の居住地かもしれない。あるいは、反対側からなら開ける術があるかもしれない。

そんな都合が良いこともそうそうないだろう。本気にしていたわけではないが、一抹の思いをかけた。

「ベラ、あそこから先の様子を見てくることってできますか?」

アリサは換気用のファンをライトで照らし出した。壁を登れる彼女なら、恐らくその先に行くこともできるだろう。

光を向けても奥までは見えず、どうなっているかここからでは分からない。だが、いずれは反対側に繋がっているはずだ。

隙間は狭く、アリサがベラにしがみついたまま通ることは少々難しそうだが。ベラだ

けなら、恐らく通れるだろう。
　こくりと彼女は頷く。
「私は暫くここでゲートを開けられるかどうか調べてみるので、あなたは上からどうなっているか確認してきてください。もしかしたら、そっちからなら何とかできるかもしれませんし」
「……わかっタ」
　ベラは脚を素早く動かすと、壁を何の苦もなく登り始める。遠ざかっていくその背中に声をかけた。
「無茶はしないでくださいね！駄目そうだったら戻ってきてください！」
　彼女はこちらをちらと見、真っ白い手を挙げて応じると隙間に身を押し込め、奥の暗い空間に入り込んでいった。

??

　今日の人類が住む「基盤」であるが、人の手が付かない場所は多く、対策もなしに探索を行うのは非常に危険である。しかし、不思議なアーティファクトや新しい発見、冒険そのものを求めて旅をする人間は後を絶たない。

「冒険者」「探索者」「深淵歩き」「スカベンジャー」。彼らは様々な名で呼ばれ、そして自称する。

「ストーカー」も特殊なれど、その一つに数えられている。

「辺境の旅路」上巻より。

??

ベラを見送ってから既にそれなりの時間が過ぎていた。彼女は未だに戻らず、アリサは一人待ち惚けている。

駄目元だが、思いつくことは大体やった。けれども操作盤はうんともすんとも言わないし、がっちり閉じられた扉は全く動かない。あの換気口以外に通り道になりそうなものもない。

この無駄な奮闘の末、アリサは結論付けた。少なくとも自分にこのゲートを抜けることはできないと。

こうなるとやはり、どうしようもない。ベラが戻ってきたらさっさと引き返すことにしよう。

アリサは壁にもたれかかって座り込んだ。今日も結構な距離を歩いたから、足も正直

疲れている。少しくらいは疲れを抜いた方がいいと思って、軽く目蓋を閉じた。
周りは不思議なほどの静寂に包まれていた。思えば、一人きりになるのは暫くぶりだ。最近はどこに行くにしてもベラがずっと近くにいたものだから、少しばかりの違和感を覚える。
何とも言えない、居心地の悪さ。彼女の尻尾が脳裏に揺れ、無性に恋しくなった。
やることもなく、寂しく物思いに更けていると、アリサはずっと遠くの方から低い地響きのような音がすることに気がついた。
反射的に辺りをライトで確認するが、周りに異常は特にない。それもそのはず、その音は自分達が来た方角からやって来ているのだから。
不安に襲われる。頭に浮かぶのは以前に遭遇したアノマリーの類だ。そうでなくても、それがアリサにとって良くないものであろうことは何となく想像がつく。
得体の知れないものはまず警戒すべきだ。「基盤」は摩訶不思議なことだらけだが、その大半が大なり小なり人間にとって災いであることをアリサはもう知っている。臆病であることを恥じる必要性は何処にもなかった。
嫌なことだが、慣れたものではあった。だが、いつも身を守ってくれるベラは今いない。この時、自分の身は自分で守らなければならなかった。近くの物陰に身を隠し、拳銃を取り出す。

それは異常なほどの速さでこちらに近づいている。
ただのミュータントだったとしても、ほぼ丸腰のアリサにとっては危険極まりない。なにより、これは絶対にただの代物ではないだろう。普通じゃない。生唾を飲み込むが、これは――。
白い閃光が闇に浮かんだ。段々とこちらに近づいてくるにつれ、強烈なものになる。地響きの音と共に、何かが削られる、あるいは引き摺られるような独特な音。
アリサはとっさに身構えるが、次第に明らかになるその姿を捉え、予想もしていなかったその正体に一瞬我を忘れて呆然とした。
それは、アリサにとっては不思議な形をした人工物だった。背は低く、平べったいが巨大であり、箱型だ。上部からは騒音に合わせて白い煙を吐き出している。全周が鉄板で覆われ、左右の履帯が忙しなく動いている。
「車……？」
アリサは酷く惚けた様子で呟いた。
彼女にとって車を見ることは初めてではない。村には古いトラクターがあって、共有の財産として使われていた。燃料の消費が酷いからといって滅多に表に出されなかったが、それでも村にとっては宝物と呼べるほどのもので、貴重品だった。
だが、それもこれに比べればどうだろう。よっぽど小型だったし、なによりもこんな

に重厚な作りでもなかった。
車をミュータントが使うはずがない。こういった人工物は、人間のものだ。
アリサの目的は思わぬ形で達成された。待ち望んでいた人間との遭遇に、アリサはどう反応すればいいのか頭が追いつかない。何も用意ができていなかった。物陰から出て、ふらふらと歩き寄っていく。
全身がヘッドライトに照らし出され、思わず身を捩る。車両は少し離れた位置で停車した。ハッチが開いて中から人が出てくる。
大人の女性だった。彼女は物珍しい迷彩服に身を包み、手には長い棒状のもの――恐らくは自動小銃の類――を持っている。分厚いベストは弾倉やその他のもので膨らんでいるのだろう。人目見ただけで戦闘要員であると分かる、軍人然とした格好。
少し燻んだ色の金髪を後ろで縛っていて、少し離れたここからでも彼女が端正な顔立ちをしていることが分かった。
アリサは内心安堵した。格好は物々しいが、盗賊や追い剥ぎと聞いてイメージするようなものではない。
正直な話、たとえ人間に出会えたところで相手が友好的であるとは限らなかったのだ。自分を見るや否や、襲いかかってくる類の悪人だっていることだろう。ひとまずそういう相手ではないと思い、表情を綻ばせた。

「そこで止まりなさい！」
だが予想に反し、その女性は大声で叫ぶと、手に持っていた小銃をこちらに向けた。銃身に取り付けられたライトもまたアリサを捉えている。
びくり、と身が竦み上がる。まさか銃を向けられるとは思っておらず、アリサはとっさに両手を上げた。
「あ、あのあの！私、迷ってしまっていて！あ、怪しい人間じゃないです！私、良い人間！」
自分でも何を言っているのか分からなかったが、それでも必死に敵意がないことをアピールし、安全であることを証明しようとする。
彼女は銃口を向けたままこちらにやって来ると、警戒心を隠さずにアリサに問答を重ねる。
目を開けているのかさえ分からない、重度の糸目。それでも、突き刺すような鋭い視線を感じた。
「武器は？」
その口振りは、ないはずがないという前提から成り立っていた。
「ポケットに拳銃があります！」
「どうしてこんなところに？随分と若いけど」

「住んでた村から逃げてきたんです。それで、迷ってしまって――」

そんな問いかけを幾つか。アリサは小柄な上、実際まだ十五歳。たった一人で居住地の外を歩くには余りには正直幼過ぎるし、怪しまれるのも無理はないだろう。

村から逃げ出した理由に関しても聞かれたが、軽く説明をすると彼女はふぅん、とだけ鼻を鳴らした。少し心配ではあったが、特に気にしている様子はなさそうだ。むしろ興味がないといったところか。

考えてみれば、流行病にかかったから追い出された、とかいう理由を想像されてもおかしくはなかったのだ。そういったことに比べれば、所詮そんなことでしかない。多分、ありふれたことなのだろう。

質問攻めも一段落してアリサはほっと息を吐く。乗り切ったようだ、と安堵する。だが、一度矛先を収めた彼女はしかし、目敏く一つのことに気がつくと指摘を飛ばした。

「……それは？あんたの血ではなさそうだけど」

彼女が指差しているのはアリサの背中。完全に予想外の話で、何のことを言っているのかよく分からない。首を傾げ、少し考えて……気がついた。ぞわ、と致命的なミスに心臓が飛び上がる。

そうだ。自分が抱えている背嚢はあの時、血塗れになったままなのだった。洗ったりはしても、布に染み込んだ血液はそうそう落ちたりしない。

日が経って既に赤みは抜け、黒ずんだ染みでしかないものの、見る人によってはそれが血であることに気がつくだろう。実際、彼女は見抜いていた。

「……これは」

アリサはとっさに答えることができなかった。冷や汗が滴り落ちる。

これに関して話すことはつまり、ベラについて話さなければならない。彼女は今ここにいないから、その間に説明できる。印象を良くできるよう、努力することもできたかもしれない。だがこれに気が付かれてしまった今、全てが薄っぺらいものになってしまうのだった。

(怪我をした？いや、私にそんな大怪我の跡はない。ミュータントの返り血？それっぽいけれども、それなら背嚢だけが汚れている理由にならない。これだけの量なのだし、服だって汚れているはずだって言われるだけ……)

必死に頭を回転させるが、まともな言い訳は思いつかない。

そもそも、ベラについては元々危惧していたことだった。当然、考えて然るべきことだが後回しにしていた。

だが、まさかこんなに早くその時が来るとは思っていなかったのだ。

「なに？答えられない？」

「えっと、あの、その……」

しどろもどろになるうち、別のハッチが開いてもう一つ、金髪が頭を出した。
その人もまた女性だ。姉妹なのだろうか、切れ目の女と瓜二つの外見をしている。背丈も大して変わらない。異なる点は彼女が切れ目でない点と、髪が比較的短く切りそろえられていることだろうか。ぱっちり開いた緑色の三白眼がアリサをまっすぐ見つめている。
「姉さん、その子びびってるよ」
彼女は笑ってそう言うが、対して糸目の女は少し困ったような顔をした。
「イーリャ、中にいなさいって言ったでしょ」
「いいのいいの。大したことないよ」
そうして三白眼の女は車両から降りてきて、特に躊躇うこともなく糸目とアリサの間に入って来る。彼女は散弾銃と思われる筒の長い銃を持っているが、吊り紐で背負い込んでいるだけで、その先を向けて来る事もない。
アリサは望外なところから助け舟がやって来たと思った。縋り付くほかない。
「お嬢ちゃん、名前は？」
「あ、アリサ。アリサ・クレーヴェラ」
糸目が眉毛を少しだけ吊り上げたが、焦るアリサは気がつかなかった。
「そ。アリサちゃん。私達はストーカー。この基盤の……あー、専門家みたいなものだ

よ」

ストーカーという言葉には聞き覚えがなかったが、話は続けられる。

「さて、じゃあ簡単に説明するよ。君が何者なのか、専門家の私達にも全く検討がつかない。だって、ここは君みたいな子供がいるべき場所じゃないからね。余りにも人里から離れ過ぎてるし、不自然極まりない。本来なら、そう、死体で見つかるべき存在なんだ。ていうかバラバラの骨かな。形が残っていればマシな方だね」

ふふ、と笑いながらそんなことを宣う彼女。緑眼はやはり優しい色をしているが、世間話でもするかのように口に出したことは凄惨極まりない。

バラバラの骨。背筋が寒くなったが、あながち間違ってもいない。もしもアリサがベラに出会わなかったら、まさにそうなっていた。餓死か、衰弱死が先だったかもしれないが。

――いや、あの時壁が割れていなかったとしたら、その時に死んでいた。ミュータントに食われて、それこそバラバラ死体だ。

割れていたとしても、運良く水に落ちず何処かの突起にぶつかっていたりでもしたら、死んでいた。腕や足や首が、ぐちゃぐちゃに折れ曲がって。

あるいは水に落ちても、運が悪ければ溺れ死んでいた。肺を水で一杯にして、腹を腐ったガスで膨らませて。

アリサが死ぬタイミングは、それこそ幾らでもあったのだ。アリサは本来、死ぬべきだった。既に死んだはずだった。

やはり先日の亡霊らしきアノマリーのことが頭に浮かんだ。もしかしたら自分は死んでいるのだろうか。気がつかないうちに死んで、亡霊になって、「基盤」を彷徨っていたのだろうか。トンネルの闇に囚われて。あの人影は、同族たる自分を探していたのだろうか。

頭を振る。

いや、自分は死人ではない。こうして生きているじゃないか。だから疲れるし、腹が減るし、喉が乾く。ベラの為に皮膚を切れば、真っ赤な鮮血が出るし、ぴりっとした痛みも感じる。生きている証拠だ。

そうやって、無理やり疑念を振り落とした。

「……どれくらい離れているんですか」

「んー……自慢じゃないけど、この装甲車は一日で五〇キロから一〇〇キロは踏破できる。回り道が何度もあったし、直線距離で進めてないけど、それでも一番近くの居住地から五日は経ってるんだよ」

アリサは言葉を失った。

そんなにも離れていたとしたら、居住地がずっと見つからなかったのも納得のこと

だ。むしろどうやって行き着けばいいのか。
彼女達には車があるからいいが、こちらは徒歩なのだ。永遠と歩き続けて、たとえ迷いなく向かえたとしても一体いつ辿り着けたことだろうか。
「それで、君は何者？ただ運が良いだけの少女？それとも――」
その時だった。
目の前に突然、白いものが映る。同時に酷く煩い重低音と、何かが弾けるような高音がして、アリサはぐんっと後ろに引っ張られた。
背中を何かに掴まれて後ろに引かれたのだった。あまりにいきなりのことに、首が追い付かず鈍痛が走る。
痛む首を回して何が起こったのか見ようとして、すぐ側にベラがいることに気がつく。ベラはアリサを庇うように立っていた。腕を鎌のような形に変化させ、牙を剥き出しにして土煙の向こう側を睨みつけている。
「な、何してるんですか！」
「……アリサ、あいつラあぶナイ。きズつけられルとこロだっタ」
「そんなことっ……」
否定しようとするが、実際のところは分からない。彼女達が自分をどうするかなんて全く分からなかったし、何より銃口は向けられたままだったから。

ベラは銃が危険な武器であることを知っている。それも当たり前だ、一度彼女は銃を持った人間を殺しているが、その時に彼もまた抵抗したはずなのだから。
「やっぱりね。こんなとこじゃないかと思ったの」
「……いや、私は正直こんなミュータントが出てくるとは思ってなかったな」
「そんなのだから駄目なのよ。私に任せておきなさい」
土煙の中からストーカー達も姿を見せた。臨戦態勢だ。怪我をした様子もない。
あの不意打ちを避けるほどだ。きっと相当な手練れに違いなく、二人とも対話のムードは消え去っていた。
厄介なことになった。いや、殆ど最悪なことになった。
アリサは頭を抱えるが、ベラはそんな彼女を気にせず威嚇の音を出していた。